彩の国さいたま

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第248集

深　谷　市

上敷免北遺跡

県道深谷妻沼線関係埋蔵文化財発掘調査報告

2000

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいくにづくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを推進するため、種々の施策を講じています。

その中のひとつとして、快適でうるおいのある生活空間の形成のために、「県内1時間道路網構想」を策定し、高速道路、地域高規格道路、インターチェンジにアクセスする道路、都市内街路などの、幹線道路から生活道路に至るまで、体系的な道路網の整備を推進しています。その一環として、県道深谷妻沼線の深谷市明戸地内において拡幅工事が行われることとなりました。

工事用地内には、埋蔵文化財包蔵地が所在しており、縄文時代から近世にわたる遺跡であることがわかっていました。

その取扱いにつきましては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。調査につきましては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、道路建設課の委託を受け当事業団が実施しました。

深谷市は、多くの遺跡が所在する所として知られておりますが、特に明戸地区周辺は、早くから弥生時代の再葬墓が発見されるなど、学史においても注目されてきたところです。近年では、国道17号線深谷バイパスの工事などに伴って多くの遺跡が調査され、縄文・弥生時代から古代にかけての集落の変遷が明らかにされるなど、多くの成果が得られています。

今回の発掘調査では、縄文時代を中心として近世にわたる遺構、遺物が検出されました。

本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及や教育機関の参考資料として、広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に関する諸調整にご尽力をいただいた埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、道路建設課、同熊谷土木事務所、深谷市教育委員会並びに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成12年1月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　荒　井　　桂

例 言

1．本書は、深谷市に所在する上敷免北遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺跡番号、略号、代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

№60－119

ＪＳＫＭＮＫＴ

深谷市明戸７７２番地２他

平成10年１月３０日付け教文２－182号

3．発掘調査は、県道深谷妻沼線拡幅事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、道路建設課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が主体となり実施した。

4．本事業は、第Ⅰ章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については、栗島義明、吉田稔が担当し、平成10年２月１日から平成10年３月31日まで実施した。整理報告書作成作業は木戸春夫が担当し、平成11年10月１日から平成12年１月31日まで実施した。

5．遺跡の基準点測量は、新日本航測株式会社に委託した。

6．発掘調査時の遺構写真撮影は各担当者が行った。遺物写真撮影は大屋道則が行った。

7．出土品の整理・図版の作成は、桜井元子の協力を得て木戸が行い、縄文土器は市川修が行った。本文の執筆は、Ⅰ－１を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、Ⅱを桜井が、Ⅳ－１を市川が、それ以外は木戸が行った。

8．本書の編集は木戸が行った。

9．本遺跡に関する刊行物は、当事業団年報18等があるが、内容については本書が優先する。

10．本書にかかる資料は平成11年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。

11．本書の作成にあたり下記の方々からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。（敬称略）

古池晋禄　青木克尚　知久裕昭　橋本利平

山田裕一

凡 例

1．遺跡全測図におけるＸ・Ｙ座標値は、国土標準平面直角座標第Ⅵ系に基づく座標値を示す 。また、遺構図における方位は、全て座標北を示している。

2．グリッドは10m×10m方眼で設定し、グリッドの呼称は、北西隅の杭番号である。

3．遺構図及び実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

遺構図　竪穴住居跡・井戸跡・土壙…1/60
　　溝跡…1/80

遺物図　土器…1/4 石製品・土製品・拓本・・1/3

上記に合わないものに関しては、スケール及び縮尺率等をその都度示している。

4．全測図等に示す遺構表記の略号は以下のとおりである。

ＳＪ・住居跡 ＳＥ・井戸跡 ＳＫ・土壙 ＳＤ・溝跡

遺構図中のドットは、遺物の出土位置を示す。

5．包含層出土の縄文土器の図版で、遺物番号の下の記号は遺物の出土場所を表し、Ｔ３は３区出土を意味する。特に表示の無いものは２区出土の遺物である。

6．遺構断面図における水平数値は、海抜高度を示しており、単位mである。

7．遺物観察表の内容は次のとおりである。

・胎土は、肉眼観察で次のように示した。

Ａ・赤色粒　Ｂ・石英　Ｃ・長石　Ｄ・角閃石

Ｅ・白色粒　Ｆ・白色針状物質　Ｇ・雲母

Ｈ・砂粒　Ｉ・片岩　Ｊ・礫

・焼成は、肉眼観察によって以下の分類とした。

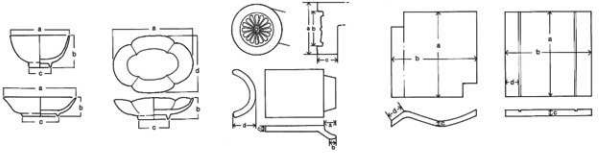
Ⅰ…良好　Ⅱ…普通　Ⅲ…不良

・色調については、小林・竹原「新版標準土色帖」1992に拠った。

9．本書に掲載した地形図は、以下のものを使用した。

国土地理院　1/25000地形図「深谷」

近世遺物実測部位凡例



目次

序
例言
凡例
目次
Ⅰ　発掘調査の概要
　1　調査に至る経過……1
　2　発掘調査・報告書作成の経過……1
　3　発掘調査・整理・報告書刊行の組織……2
Ⅱ　遺跡の立地と環境
　1　地理的環境……3
　2　周辺の遺跡……3
Ⅲ　遺跡の概要……7
Ⅳ　遺構と遺物
　1　縄文時代
　（1）　住居跡……9
　（2）　土壙……18
　（3）　包含層……20
　2　古墳時代……42
　3　中近世
　（1）　井戸跡……43
　（2）　溝跡……43
　（3）　土壙……45
　（4）　その他の遺構・遺物……47
Ⅴ　まとめ……52

挿図目次

第1図　埼玉県の地形……3
第2図　地形分類図……4
第3図　周辺の遺跡分布図……5
第4図　遺跡周辺の地形……7
第5図　遺構全測図……8
第6図　第1・2号住居跡・遺物分布図……10
第7図　第1号住居跡出土遺物……11
第8図　第2号住居跡出土遺物（1）……12
第9図　第2号住居跡出土遺物（2）……13
第10図　第2号住居跡出土遺物（3）……14
第11図　第2号住居跡出土遺物（4）……15
第12図　第2号住居跡出土遺物（5）……16
第13図　土壙……18
第14図　土壙出土遺物……19
第15図　包含層出土土器（1）……21
第16図　包含層出土土器（2）……22
第17図　包含層出土土器（3）……23
第18図　包含層出土土器（4）……24
第19図　包含層出土土器（5）……26
第20図　包含層出土土器（6）……27
第21図　包含層出土土器（7）……30
第22図　包含層出土土器（8）……31
第23図　包含層出土土器（9）……32
第24図　包含層出土土器（10）……35
第25図　包含層出土土器（11）……36
第26図　包含層出土土製品……37
第27図　包含層出土石器（1）……39
第28図　包含層出土石器（2）……40
第29図　古墳時代の遺物……42
第30図　第1号井戸跡……43
第31図　溝跡出土遺物……43
第32図　溝跡……44
第33図　土壙……45
第34図　土壙出土遺物……46

第35図　瓦焼成遺構断面図……47
第36図　瓦焼成遺構出土遺物……48
第37図　グリッド出土遺物（1）……49
第38図　グリッド出土遺物（2）……50
第39図　ダルマガマ模式図……53

表目次

第1表　住居跡出土石器観察表……18
第2表　包含層出土石器観察表……41
第3表　古墳時代遺物観察表……42
第4表　溝跡計測表……43
第5表　土壙計測表……45
第6表　土壙出土遺物観察表……47
第7表　グリッド出土遺物観察表……50

図版目次

図版1　1区全景
1区10号土壙遺物出土状況
5区全景
6区全景
図版2　2区全景
2区第1号溝跡・第1号土壙
3区全景
4区全景
4区第1号土壙
図版3　土壙出土土器（第14図3）
土壙出土土器（第14図4）
包含層出土土器（第19図1）
包含層出土土器（第19図2）
包含層出土土器（第19図3）
包含層出土土器（第19図4）
包含層出土土器（第19図6）
包含層出土土器（第19図7）
図版4　包含層出土土器（第19図8）
包含層出土土器（第19図9）
包含層出土土器（第19図5）
包含層出土土器（第19図10）
第1号住居跡出土土器1（第7図）
図版5　第1号住居跡出土土器2（第7図）
第2号住居跡出土土器1（第8図）
第2号住居跡出土土器2（第8図）
図版6　第2号住居跡出土土器3（第9図）
第2号住居跡出土土器4（第10図）
土壙出土遺物（第14図）
図版7　包含層出土土器1（第15図）
包含層出土土器2（第15図）
包含層出土土器3（第16図）
図版8　包含層出土土器4（第17図）
包含層出土土器5（第17図）
包含層出土土器6（第18図）
図版9　包含層出土土器7（第20図）
包含層出土土器8（第20図）
包含層出土土器9（第21図）
図版10　包含層出土土器10（第21図）
包含層出土土器11（第22図）
包含層出土土器12（第22図）
図版11　包含層出土土器13（第23図）
包含層出土土器14（第23図）
包含層出土土器15（第24図）
図版12　包含層出土土器16（第24図）
包含層出土土製品1（第26図）
包含層出土土製品2（第26図）
図版13　第2号住居跡出土石器1（第12図）
第2号住居跡出土石器2（第12図）
包含層出土石器1（第27図）
図版14　包含層出土石器2（第28図）
土壙出土遺物1（第34図）
土壙出土遺物2（第34図）
図版15　グリッド出土遺物1（第37図）
グリッド出土遺物2（第37図）
グリッド出土遺物3（第38図）

Ⅰ　発掘調査の概要

1．調査に至る経過

埼玉県は関東地方の中西部に位置し、県全域が都心から100㎞の圏内に含まれる。県では快適でうるおいのある生活空間の形成のために、道路網の整備を進めている。「県内１時間道路網構想」を推進し、高速道路、地域高規格道路インターチェンジにアクセスする道路、都市内街路などの、幹線道路から生活道路に至るまで、体系的な道路網の整備計画である。県道深谷妻沼線の整備もこうした事業の一つである。

道路建設課から県道深谷妻沼線の建設に先立ち、平成９年１月23日付け道建第337号で、文化財の所在及びその取扱いについて、文化財保護課長あて照会があった。それに対して文化財保護課は、平成９年６月26日付け教文第482号で、概ね次のような回答をした。

１　埋蔵文化財の所在

工事予定地内の深谷市明戸地内の該当個所には、周知の埋蔵文化財包蔵地が所在します。

名　称	種　別	時　代	所在地
上敷免北遺跡（60－119）	集落跡	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世	深谷市大字明戸

２　取扱いについて

工事計画上やむを得ず上記の埋蔵文化財包蔵地の現状を変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の３の規定による発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。

その後、道路建設課と文化財保護課との間で取扱いについて協議を重ね、現状保存が困難であり、記録保存の措置を講ずることになった。

発掘調査の実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、道路建設課・文化財保護課の三者で工事日程、調査計画・調査期間などについて協議し、平成10年２月１日～３月31日までの期間、発掘調査を実施することとした。

文化財保護法第57条３の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、第57条１項の規定による発掘調査届が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。発掘調査に係わる通知は以下のとおりである。

平成10年１月30日付け教文第２－182号

（文化財保護課）

2．発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

上敷免北遺跡の発掘調査は平成10年2月１日から3月31日まで実施した。調査面積は1,100㎡である。調査は便宜上調査区を６区に分割して行った。

２月　現地で事業者と打ち合わせを行い、調査範囲等について確認する。その後現場事務所を設置する。調査区は、道路際にあるため安全確保のための囲柵工事を行い、表土掘削に入る。

２月前半　調査は３区から行った。遺構確認を行ったところ、竪穴住居跡１軒、溝１条、河川跡が検出されたが、撹乱が激しく遺構の殆どは壊されていた。続いて４区の調査に入った。４区は、土壙１基、溝１条及び河川跡が検出された。３区、４区ともに遺構写真撮影の後、平面図を作成して終了した。なお、平面図の作成と並行して調査は５区に入った。

２月後半　５区では土壙１基、溝跡２条及び調査区西側で礫の集中１箇所を検出した。これらの遺構を調査し遺構写真及び図面の作成が終了したのは下旬であった。５区の調査開始よりやや遅れて２区の調査を開始した。２区も撹乱が激しく、検出されたのは井戸跡１基、土壙１基、溝跡１条であったが、縄文時代の遺物包含層があり、遺物の出土量は多かった。調査の後、

5区に続いて写真撮影を行い、図面の作成が終了したのは3月に入ってからであった。

3月前半　2区の図面作成と並行して1区の調査に入った。1区は今回の調査区の中では遺構の密集度が高く、土壙10基、溝跡1条、ピット多数、河川跡の他に縄文時代の遺物包含層を検出し、遺物も比較的豊富であった。図面の作成を終えて1区の調査を終了したのは半ば過ぎであった。図面の作成段階で調査の主力は残された6区に移っていった。

3月後半　6区は溝跡が多く、土壙3基、溝跡7条、ピット数基という調査内容であった。半ばから後半かけて遺構の写真撮影を行い、図面の作成を終了したのは下旬にかかる頃であった。調査終了の後、埋め戻し囲柵の撤去をして3月末に全ての調査を終了した。

整理・報告書作成

整理・報告書作成事業は、平成11年10月1日から平成12年1月31日まで実施した。10月前半に遺物の接合・復原を行い、作業の済んだものから実測、拓本取りを行った。続いて実測図のトレースを行い、遺物写真撮影は11月前半に行った。並行して遺構実測図、写真等の記録図面類を整理し、第2原図を作成してトレースを行った。11月中旬から版下の図版組み、原稿執筆、割付を行って11月末には割付を完成した。その後、入稿し3回の校正を行って、1月末に本書の印刷を終了・刊行した。

3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

（1）発掘調査(平成10年度)

理事長	荒井　桂
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	鈴木　進
〈管理部〉	
専門調査員兼経理課長	関野栄一
庶務課長	金子　隆
主査	田中裕二
主任	長滝美智子
主任	腰塚雄二
主任	江田和美
主任	福田昭美
主任	菊地　久
〈調査部〉	
調査部長	谷井　彪
調査部副部長	水村孝行
調査第三課長	浅野晴樹
主任調査員	栗島義明
主任調査員	吉田　稔

（2）整理事業(平成11年度)

理事長	荒井　桂
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	広木　卓
〈管理部〉	
副部長兼経理課長	関野栄一
庶務課長	金子　隆
主任	田中裕二
主任	江田和美
主任	長滝美智子
主任	福田昭美
主任	腰塚雄二
主任	菊池　久
〈資料部〉	
資料部長	高橋一夫
専門調査員兼資料部副部長	石岡憲雄
専門調査員	市川　修
統括調査員	木戸春夫

II　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

深谷市は埼玉県北部に位置し、北は利根川をはさんで群馬県に接する。東は妻沼町と熊谷市、南は川本町と花園町、西は本庄市、岡部町、寄居町に囲まれている。深谷ネギの産地として名高く、また近代日本経済の礎を築いた渋沢栄一の生誕地としても知られている。現在は工業団地が形成され、高層マンションを含む住宅の増加も目立っている。また国道17号深谷バイパスや上武国道などの道路交通網も整備され、埼玉県北部地域の商工業の中心として発展しつつある。

深谷市の地形は、ＪＲ高崎線付近を境として、北半の妻沼低地と南半の櫛挽台地に二分される。

櫛挽台地は荒川によって形成された扇状地性の洪積台地で、寄居付近を扇頂部として北へ広がっている。台地の中心部は平坦であるが、北縁は藤治川等が流れ、地形は変化に富んでいる。妻沼低地は、西は利根川と烏川の合流域付近から東は利根大堰付近までの東西に長い低地で、自然堤防および荒川の新扇状地による微高地、後背湿地や古流路跡からできている。上敷免北遺跡はこの妻沼低地に所在し、北を小山川、南を福川に挟まれた東西に長い自然堤防上に立地している。遺跡の範囲は南北約400m、東西約1500mに及び、標高は約34mである。過去に数次にわたって発掘調査が行われているが、今回の調査区域は遺跡の東端にあたる。

2　周辺の遺跡

今回の調査成果の主体となる縄文時代を中心に、本遺跡の位置する妻沼低地及び隣接する櫛挽台地の遺跡を概観する。

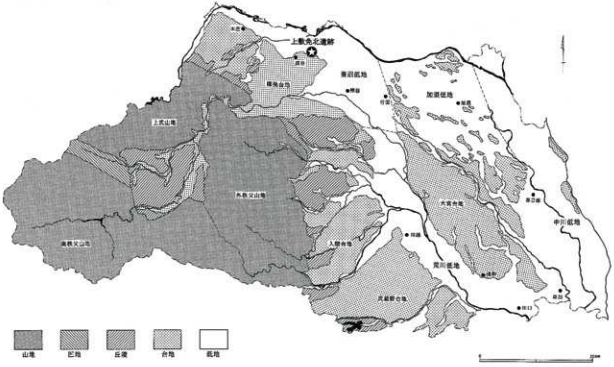
旧石器時代は、妻沼低地では現在までに遺跡の所在は知られていない。櫛挽台地では、北縁部に立地する熊谷市篭原裏遺跡や深谷市東方城跡で尖頭器が出土している。

縄文時代は、草創期から早期にかけての遺跡数は少なく、中期から後期にかけて急激に増加し、晩期になるにしたがってやや減少するという傾向が見られる。

草創期から早期の遺跡は櫛挽台地西側に多く、岡部町西谷遺跡では爪形文土器や押圧縄文土器、有舌尖頭器等が出土している。東光寺裏遺跡では微隆起線文土器が出土している。

前期は、台地北縁部まで遺跡が見られるようになる。

第１図　埼玉県の地形図

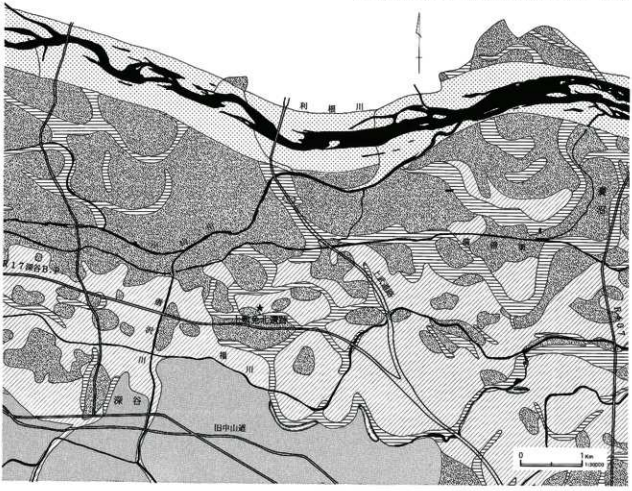


深谷市常盤町東遺跡では諸磯ａ式期の埋設土器１基、土壙９基が検出されており、岡部町四十坂遺跡では関山式期の住居跡が検出されている。

中期から後期は遺跡数が増加する。台地部では、深谷市根岸遺跡で中期中葉から後期初頭にかけての住居跡が検出されており、勝坂式と阿玉台式の最末期の土器が伴出している。市内で北関東系の阿玉台式土器が遺構内から出土した初例であり、信州から南関東を中心に分布する勝坂式土器の分布圏と、阿玉台式土器の分布圏が重複することが確認された点は重要である。深谷市前畠遺跡、島之上遺跡、出口遺跡、岡部町芝山遺跡は、扇端湧水の豊富な谷筋の最奥部に立地している。加曽利ＥⅡ式～称名寺Ⅰ式の良好な土器群の他、打製石斧や石鏃、石棒等が出土している。深谷市萱場松原遺跡は台地北縁部に立地しており、加曽利ＥⅣ式期の集落跡が確認されている。ここで出土した黒曜石は、島之上遺跡のものと共に長野県諏訪郡星ヶ塔産と同定されている。谷沿いに位置する深谷市小台遺跡では住居跡や集石遺構等が検出されており、加曽利ＥⅡ式期と称名寺Ⅱ式期の２時期に集落の最盛期が見られる。後期に比定される桜ヶ丘石組遺跡では8基の組み石遺構が検出されており、県指定史跡となっている。低地南端部に所在する深谷市深谷町遺跡では、加曽利ＥⅢ式～堀之内Ⅱ式の土器片や赤彩土器、丸木舟状木製品等の遺物や、トチ・クルミなどの種子が多量に出土している。また、川跡３条、土壙１基等が検出されており、川跡では足場状に丸太を設置した遺構が見られる。また２号川跡は、人工流路の可能性が指摘されている。

後期から晩期にかけては、遺跡の分布が台地から低地へと更に広がる傾向が見られる。台地際の水田面に位置する深谷市城下遺跡では堀之内Ⅰ～Ⅱ式の埋甕や

第２図　地形分類図



第３図　周辺の遺跡分布図

1．上敷免北遺跡　2．起会遺跡　3．戸森松原遺跡　4．森下遺跡　5．上敷免遺跡　6．本郷前遺跡　7．新屋敷東遺跡
8．新田裏遺跡　9．明戸東遺跡　10．原遺跡　11．ウツギ内遺跡　12．砂田遺跡　13．柳町遺跡　14．城北遺跡　15．居立遺跡
16．前遺跡　17．清水上遺跡　18．根絡遺跡　19．横間栗遺跡　20．関下遺跡　21．宮ヶ谷戸遺跡　22．東川畑遺跡　23．皇沼城跡
24．深谷町遺跡　25．深谷城跡　26．伝幡羅太郎館跡　27．城下遺跡　28．東方城跡　29．庁鼻和城跡　30．桜ヶ丘石組遺跡
31．割山遺跡　32．秋元氏館跡　33．小台遺跡　34．西別府館跡　35．新開氏館跡　36．蓮沼氏館跡　37．荏原氏館跡
A．上増田古墳群　B．木の本古墳群　C．別府古墳群　D．在家古墳群　E．籠原裏古墳群

特殊遺構等が検出されている。特殊遺構からは、底部が穿孔された注口土器が出土している。妻沼低地の自然堤防上に立地する深谷市明戸東遺跡では、称名寺式末～堀之内Ⅰ式の住居跡が検出されている。称名寺式から堀之内式への移行期とみられるものもあり、注目される。同じく自然堤防上に立地する深谷市新屋敷東遺跡では、後・晩期の集落跡が検出されている。堀之内Ⅰ式と安行３ｂ式の２時期に集落の盛期が見られ、砥石と緑色玉類が共伴し、石棒、石剣、土偶、耳飾といった多彩な遺物が出土している。妻沼低地では類例の少ない注目すべき遺跡といえる。岡部町原ヶ谷戸遺跡では、台地から後背湿地にかけての緩斜面で、後期中葉から晩期後葉の集落跡が検出されており、曽谷式高井東系の土器が多量に出土している。北関東系や関西系の土器も出土している。また、土偶、石棒等の他、火熱を受けた動物遺存体も出土している。

弥生時代は、自然堤防上に立地する深谷市上敷免遺跡で、遠賀川式土器が出土しており、県内初出の例として重要である。岡部町四十坂遺跡でも縄文時代晩期終末～弥生時代初頭の土器群が出土している。

中期には妻沼低地に遺跡がまとまって分布している。熊谷市池上遺跡、横間栗遺跡、行田市小敷田遺跡、深谷市上敷免遺跡、妻沼町飯塚遺跡等はいずれも自然堤防上に立地しており、須和田期の再葬墓が検出されている。このうち池上遺跡では、環濠とみられる溝や、多量の炭化米が出土した住居跡等が検出されている。

後期は、県内の遺跡数は急増するが、低地部で確認されている遺跡は比較的少ない。墓制は、中期で盛行した再葬墓が衰退し、代わりに方形周溝墓が出現する。明戸東遺跡では吉ヶ谷式期の住居跡16軒等が検出されている。

古墳時代は、低地部での遺跡の調査例が多く、当時低地部で活発に生産活動が行われたことが窺える。

前期は、深谷市矢島南遺跡、明戸東遺跡、清水上遺跡、熊谷市根絡遺跡でＳ字状口縁を呈する台付甕が出土している。深谷市東川端遺跡や上敷免遺跡では方形周溝墓が検出されている。

中期から後期にかけては遺跡数が激増する。多くは自然堤防上に集落を築いている。砂田前遺跡、上敷免遺跡、新屋敷東遺跡、居立遺跡では総数1000軒を超える住居跡が検出されている。城北遺跡では多数の土器を積み重ねた祭祀関連遺構・遺物が検出されており、本郷前東遺跡では石製模造品が未製品を含めて多量に出土している。古墳は、台地縁辺部に木の本古墳群が、低地には上増田古墳群等が所在している。割山埴輪窯跡では円筒埴輪をはじめ各種の形象埴輪が焼成されているが、供給先については明らかではない。

奈良・平安時代になると、低地部での集落は少なくなり、台地上に集約される。律令国家による規制が集落の形成に反映されたものと考えられている。代表的な遺跡としては榛沢郡衙に比定される、岡部町中宿遺跡がある。

中世以降は、滝瀬氏館、蓮沼氏館、幡羅太郎氏館、東方城、深谷城といった在地武士の城館跡の所在が知られている。庁鼻和（こばなわ）城は深谷上杉氏の祖・上杉憲英が、深谷城は上杉憲英の曾孫・上杉房憲が1456年に築城したとされる。これらの城跡は江戸時代までに廃城になり、周辺一帯は明治維新まで旗本知行地・幕府直轄領として扱われている。また、深谷市周辺は中山道の宿場町として栄えたことが知られている。深谷市居立遺跡では多量の焙烙が出土しているが、ここでは刻印を有するものも多く、17世紀後半の所産と考えられている。本遺跡で出土した焙烙と同様の刻印を持つものも見られ、何らかの関連が想起される。

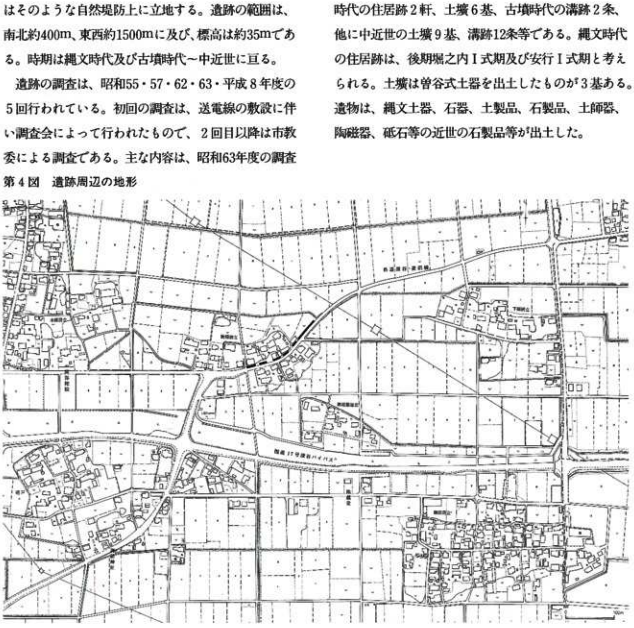
Ⅲ　遺跡の概要

上敷免北遺跡は深谷市明戸地内に位置する。深谷市は地形的に、南部の櫛引台地と北部の妻沼低地に区分できる。妻沼低地は主として利根川の作用によって形成された低地で本庄台地の北西部あたりから始まり、東は加須低地へと続く。明戸周辺は利根川の支流である福川と小山川に挟まれた地域である。当地域の河川は地形に沿って東流しており、その流れに沿って東西方向に自然堤防が発達している。これらの自然堤防は、洪水時にはかろうじて水没を免れ島のようになることから、付近には「○○島」という地名が多い。本遺跡はそのような自然堤防上に立地する。遺跡の範囲は、南北約400m、東西約1500mに及び、標高は約35mである。時期は縄文時代及び古墳時代～中近世に亘る。

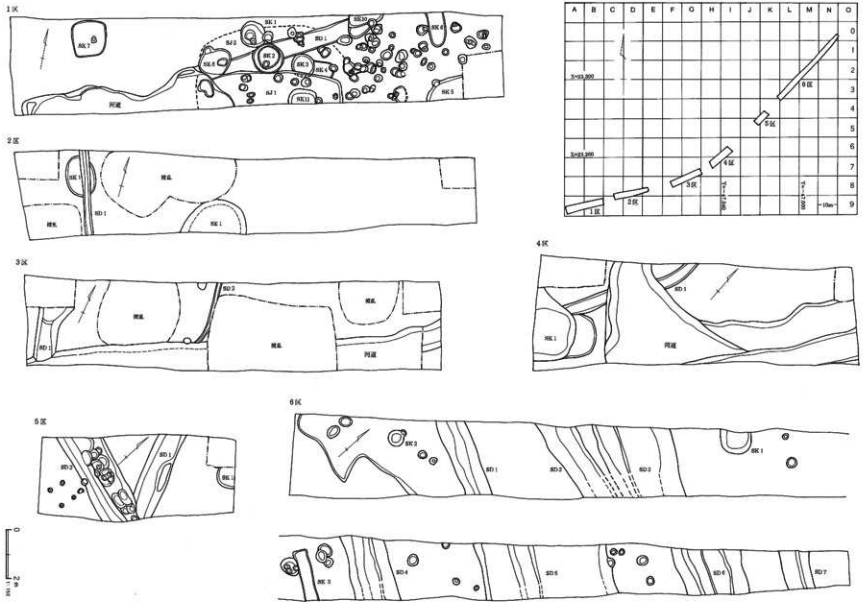
遺跡の調査は、昭和55・57・62・63・平成８年度の５回行われている。初回の調査は、送電線の敷設に伴い調査会によって行われたもので、２回目以降は市教委による調査である。主な内容は、昭和63年度の調査で住居跡３軒、土壙８基、溝跡１条が検出され、大原窯産とされる緑釉陶器 灰釉陶器、多量の坏・高台坏類、鉄滓、坩場等が出土している。遺物の内容から10世紀を中心とするものと考えられる。平成８年度の調査では、縄文後期中葉から末葉の配石遺構、柱穴、包含層が検出され、土器、石器、土製品、石製品、、玉製品が出土している。

今回の調査区は遺跡の東端にあたり、標高は約34mである。調査面積は1,100㎡である。調査は便宜上調査区を６区に区分して行った。検出された遺構は、縄文時代の住居跡２軒、土壙６基、古墳時代の溝跡２条、他に中近世の土壙９基、溝跡12条等である。縄文時代の住居跡は、後期堀之内Ⅰ式期及び安行Ⅰ式期と考えられる。土壙は曽谷式土器を出土したものが３基ある。遺物は、縄文土器、石器、土製品、石製品、土師器、陶磁器、砥石等の近世の石製品等が出土した。

第４図　遺跡周辺の地形



第５図　遺構全測図


1区
2区
3区
4区
5区
6区
SK1
SK2
SK3
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SK12
SK13
SD1
SD2
SD3
SD4
SD5
SD6
SD7
SJ1
SJ2
同道
構乱
A B C D E F G H I J K L M N O
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9
X=69,000
X=68,000
1区
2区
3区
4区
5区
6区
7区
8区
9区
10m²
0
2m

Ⅳ　遺構と遺物

1．縄文時代

（1）住居跡

第1号住居跡（第6図）

1区B－9グリッドで検出された。半分は調査区外にかかる。西側は河川跡によって壊されている。平面形は長方形を呈すると思われる。主軸方向はほぼN－76°－Eと思われる。規模は東西方向で5.2m残存しており、南北方向は1.3mほど検出された。深さは30cmであった。床面は壁際から中央に向かって緩やかに低くなっていた。床面に10基のピットが検出された。壁際にはピットが1mほどの間隔で疎らに並んでいた。主柱穴は断定できなかった。炉跡も検出されなかった。

遺物の出土状況は、床面から浮いたものが多く第2号住居跡などの遺物が混入していたと考えられるが比較的床面に近いものを本住居跡のものと判断した。

第1号住居跡出土土器（第7図1～44）

本住居跡から出土した土器は後期前葉の称名寺式系と綱取・堀之内式系の土器により構成する。

1～3、7は外傾する口縁部をもった平口縁の深鉢である。1は2本組の沈線文が鈎手状の構図を描く起点部の破片。2、3、7は口縁部に横走する沈線文を施す。4は内折する口縁部形態で、把手をもった波状口縁の深鉢である。体部には沈線文を施す。5は小波状の口縁部で波頂部には円孔を設け、口縁部は無文帯となる。6は「く」の字状に内折する口縁部形態を呈し、突起部には円孔を設ける。8、9は外傾する口縁部をもった深鉢で、口縁に沈線文が巡る。8は盲孔を設けている。9は多条沈線文が垂下する堀之内式系の土器である。10～14は2本沈線文に縄文を充塡施文した胴部破片である。11が単節ＲＬの原体を用いる他は単節ＬＲの縄文を施文する。15～20は沈線文の区画内に刺突文列を施す。16は短沈線状の刺突文を充塡施文する。15も同様なものと思われる。18、19は曲線的なモチーフ内に刺突文を充塡施文する。20は直線的で狭い区画内に刺突文を施す。21～31は無文地の上に、2本沈線文が曲線的なモチーフを描く。22、23は「J」字状のモチーフを描くと思われる。23、24には垂下する沈線文を施す。31は縦位に弧線文が連続するモチーフを施す。33～35は無文地の上に沈線文を直線的に施す。32、33は大柄な構図をとる。32は単節ＬＲを地文とし、沈線が弧線文と平行線文を縦位に施す。36は幅広い磨消縄文手法により、三角形が横位に進なる文様帯を構成する堀之内2式土器である。37～42は各種の文様を施した胴部破片を一括する。38は刻目を加えた隆帯を縦位に施す。37は櫛歯状工具による細かい条線文を施す。39は多条化した沈線文がモチーフを描く。40は渦巻文と沈線文が集合する。41は幅広の沈線によって渦巻状に施文する。42は無文部の破片である。43、44は深鉢形土器の底部で、網代痕が見られる。

第2号住居跡（第6図）

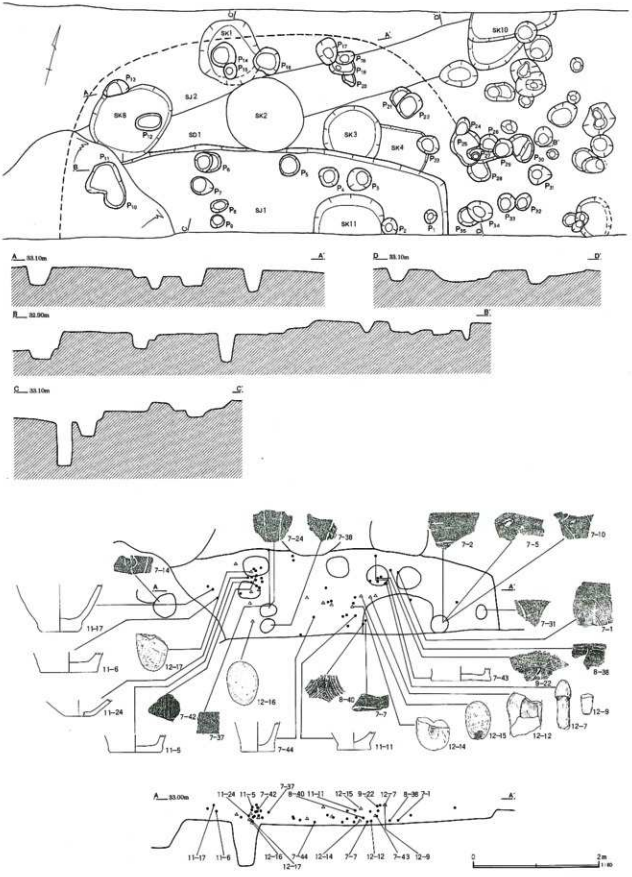
1区B－9グリッドで検出された。調査時には黒色土が堆積しており、包含層と認識であったがピットの状況等から整理の段階で住居跡と認定した。ピットの並びから円形を呈するものと考えられ、東側の張出部が入り口と思われる。主軸方向はほぼN－63°－Eと考えられる。規模は直径6～7mと思われる。ピットはほぼ1.5mの間隔で円形に並ぶ。

第2号住居跡出土土器（第8～11図）

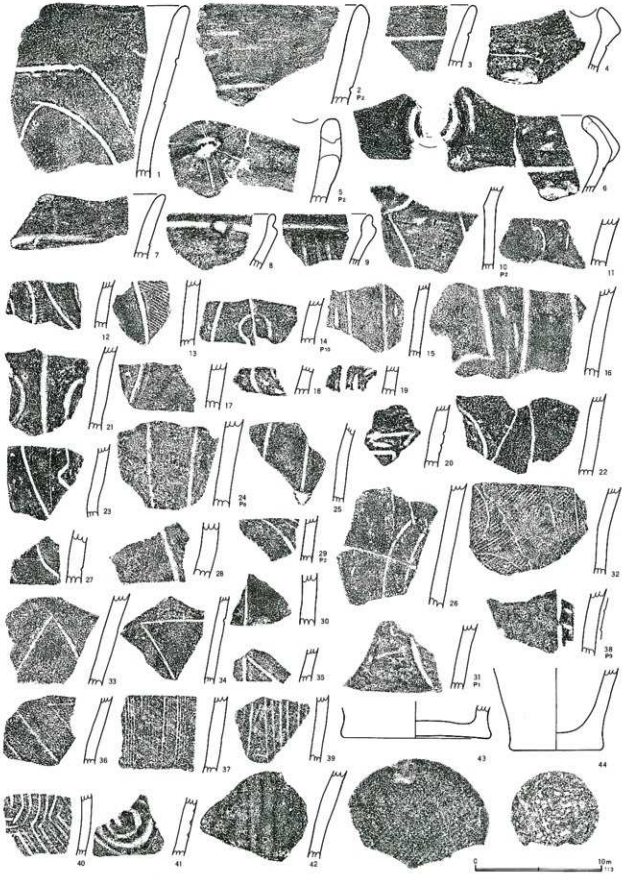
図示した出土土器は、後期から晩期の土器群で構成する。これらの多くは第1号住居跡が確認される以前に包含層出土として取上げられたもので、重複した土壙等に関与するものも含む。分離が困難なため一括して扱うものである。

第8図1、2は堀之内式2式土器である。朝顔形に口縁部が外傾する深鉢で、圧痕を加えた紐線文が横走する。内折する口縁が特徴的である。3～26は加曽利

第６図　第１・２号住居跡・遺物分布図

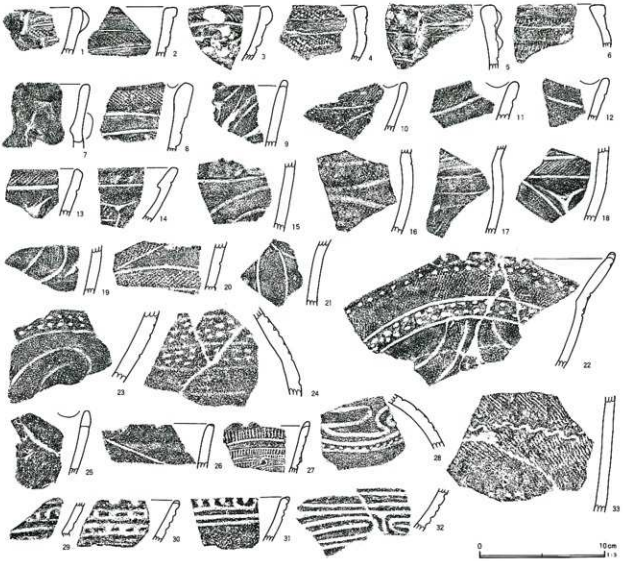


第７図　第１号住居跡出土遺物



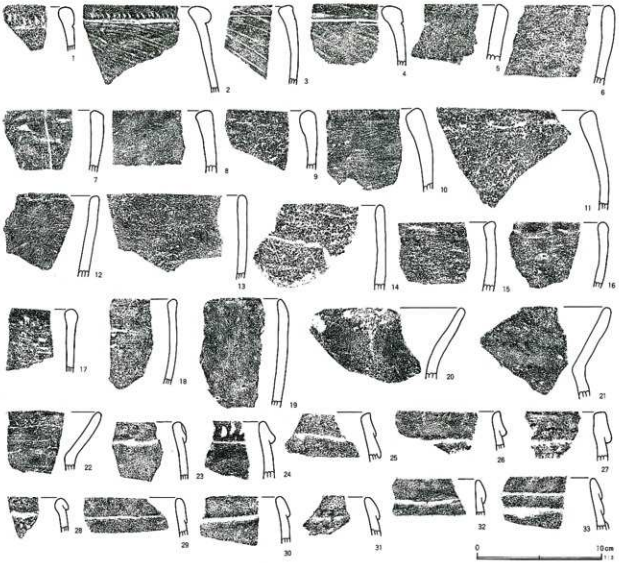
第８図　第２号住居跡出土遺物（１）

第９図　第２号住居跡出土遺物（２）



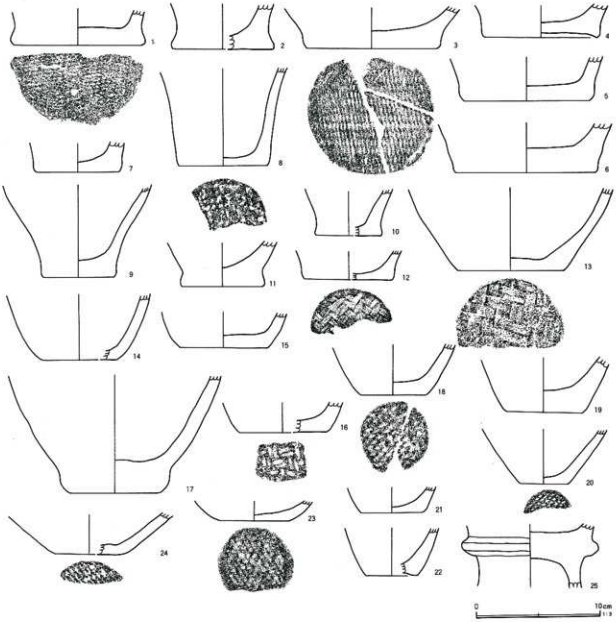
B式土器である。３、４は外反する口縁部に、刻目を施した幅広の紐線文が横走する。５は１条の内面文を施す。胴部上半には単節ＲＬを施した横帯文を施す。６は外反する口縁部の内面に１条の沈線を施し、口唇部には刻目を施文する。器面には左上りの斜行沈線文を施す。７は強く外傾する口縁部形態の深鉢土器で、口縁直下には沈線文による横帯区画文が見られ、対弧状の単位文を組合せ施文する。８は外反する口縁部に３単位の突起を施した深鉢形土器で、内面には「ノ」の字状沈線文が、突起両端には短沈線を施す。9、10は鉢形土器である。口縁には彫刻的な小波状が連なりを見せる。丁寧な研磨を施す。11は深鉢の胴下半部で、斜行沈線文を３段に施している。12、13は口縁に刻目と沈線による区画文を施す。胴部上半には単節ＬＲを施した横位区画帯が見られ、形態は12が5単位の波状口縁をもつ深鉢形で、13は甕形土器である。14～16は５単位の波状口縁をもつ深鉢形である。14には斜行沈線文を羽状に施す。15、16は口縁部を無文とする。15は大きな波状口縁の形態である。17～22は外傾が強い口縁部をもつ深鉢形で、口唇部にバラエティーが見られ、20～22の形態は後出的である。23～25は、加曽利B式後半の粗製土器である。口縁の紐線は一体化し、隆起が高く、頂部には指頭による圧痕文を連続的に施す。26は無文の粗製土器で、内面に幅広の沈線を施

第10図　第２号住居跡出土遺物（３）



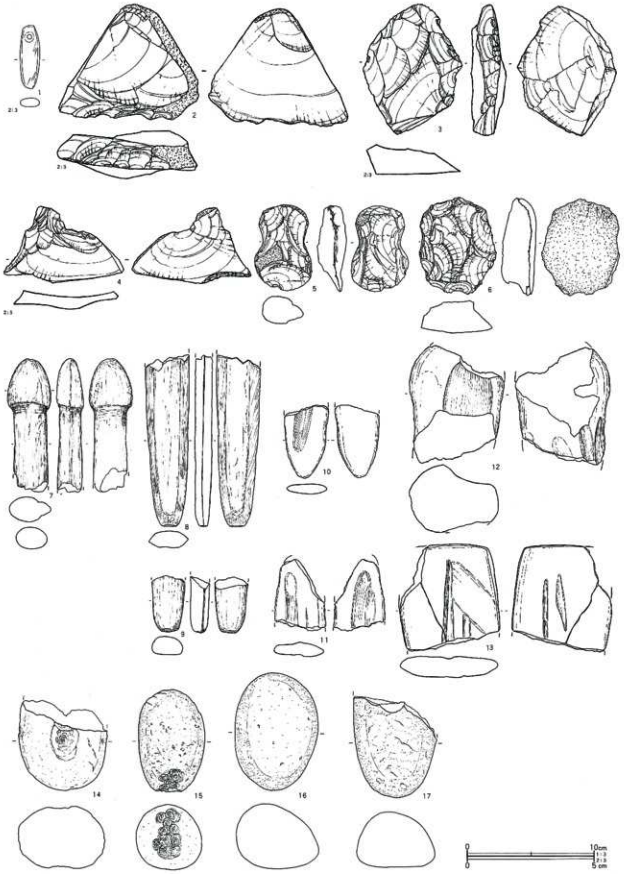
す。器面には粗い擦痕を残す。27～57は高井東系列の土器である。27～39は、「く」の字状に内折する口縁部形態をもつ平口縁土器である。27～32は口縁部が無文である。30～32は口唇端部がシャープに整形される。33、34は、「く」の字状に内折する口縁部に縄文を施文す。35は外反する口縁部に刺突文を列点状に施す。口縁には単節ＬＲの縄文を施す。36～39は、内折する口縁部に沈線文を施す。36、37は2条沈線文を施す。38は瘤状突起間と２条沈線文を施す。39は屈折部に瘤状突起を配し、３条沈線文を施す。40は４単位の突起をもった波状口縁の深鉢形土器で、「く」の字状に内折する口縁部で、突起下には孔を穿った縦長の瘤を配す。口縁には地文縄文として単節ＬＲを施し、３条の沈線文を施す。体部にも沈線を施文し、蛇行沈線文が垂下している。41は直立する口縁部形態をもった深鉢形土器である。42、43は凹線状の沈線文を施す。42は「く」の字状の口縁部形態をもつ平口縁の深鉢で、屈折部に瘤状の突起を配し、凹線状沈線文を２条施す。43は平口縁の深鉢形土器で、口縁には突起と幅広い凹線状沈線文を施す。44は外反する口縁に縦長の瘤を配した無文の深鉢形土器である。45～48は、「く」の字状に内折する口縁部形態をもつ波状口縁深鉢である。45は波頂部直下の破片で、沈線文を施す。47は２条沈線文と屈折部に刺突文を施す。46は山形の波頂部破片。縦長の

第11図　第２号住居跡出土遺物（４）



貼付文にはスリット状の短沈線を刻む。口縁には沈線文を施す。48は内折する短い口縁に２条沈線文を施す。49～52は直線的な口縁部をもつ波状口縁深鉢である。49は波底部破片で、瘤状突起を３段に配し、沈線文を施す。50は２条沈線文を施す。50、51は隆帯文により、口縁部を区画する。隆帯には刻目を施文し、口縁には沈線文が巡る。53は深鉢形土器の胴上半部破片で、稲妻状の沈線文を施している。54、55は内折する口縁部をもつ鉢形土器で、弧状の貼付文を起点に下向きの弧線文が連なる。54には地文として無節Ｒを施す。55には貼付文を上下に配置する。56、57は鉢形土器である。56には１条の沈線文が施され、57の口唇部には小突起が見られる。第９図１～８は後期安行式土器である。１、２は平口縁の深鉢形土器で、口縁部には隆起帯縄文が見られる。３、４は浅鉢形土器で、単節ＬＲを施す隆起帯縄文が見られる。５、６は内湾する口縁部形態をもつ深鉢形土器で，５は縄文帯と複段の瘤を貼付する。６は隆起帯に刻目文を施す。７は魚尾状を呈す波頂部の破片で、円孔を設けている。８は幅広の縄文帯をもつ波状口縁の深鉢で、安行２式土器で

第12図　第２号住居跡出土遺物（５）



ある。第9図9～22は晩期安行式である。9は口縁に小突起を配する。外傾した口縁部には斜行する入組状の三叉文を施す。10～12は波状口縁の深鉢形である。外傾する口縁に沿って沈線区画による縄文帯を設ける。13、14は口縁部に縄文帯を設け、体部に三叉文が見られるもの。13は彫刻的、14は入組三叉文を施す。15～21は深鉢形の胴部破片である。15、16は胴下半に縄文帯がメガネ状に連結する。17は入組三叉文を施す。18、19は無文部に彫刻的な三叉文を施す。20は斜行する縄文帯を施す。21は対弧線文を施す。22、23は短い口縁部が外傾する鉢形土器。22の口唇部にはB字状の突起を配す。口縁部は縄文帯で、口縁には刺突による円文列が巡る。括れ部には共に沈線区画内に円文状の刺突文が整然と充填される。体部には22が上向きの弧線文、23は入組文を施す。24は沈線区画内に米粒状の刺突文を施す。安行3b式土器。第9図25～26は晩期安行式とは異なる沈線文系の土器。25は波状口縁の深鉢形で、波頂部には三角形の抉りを施し、口縁には沈線による弧線文を施す。26は平口縁の土器で、口唇部には刻目文を鋸歯状に施す。口縁部には斜行する沈線を施文する。第9図27～33は東北的な後期から晩期の土器である。27は口唇部に小突起を配し、口縁部には横位区画帯とイボ状の瘤を起点として上下に分岐する木の葉状入組文を配し、沈線区画内には刺突文を充填する。後期末葉の土器である。28は壺形土器の肩部破片で、弧線文が見られ、区画沈線には列点文を施す。29は頸部破片で羊痴状文を施す。30は2条沈線間に点列を施す。大洞BC式土器である。31は口唇部に刻目が巡り、口縁には3条沈線を施す。大洞C1式土器と思われる。32は大洞A式土器と思われる。33は綾繰文を施す胴部破片である。第10図は、粗製系土器と無文土器である。1、2は紐線文系の土器である。内湾する口縁部形態で、口縁には刻目列を施す。3、4は口縁に沈線区画を設け、体部には斜行する条線文を施す。5～7は口縁部が直立する形態で、厚手の無文土器。8～11は内湾する口縁部形態をもち、体部に整形痕を粗く残した、北関東的な土器である。12～19は口縁部が直立気味の形態を呈す薄手の土器で、内外面に輪積み痕を残す。20～22は強く外傾する口縁部形態の深鉢。23～33は折返し状の口縁で輪積み痕を残す土器である。23は連続圧痕文を施す。24は刺突文を施す。25～28は厚手の折返しをもつもの。29～33は薄手の口縁形態である。33は3段構成で施す。第11図は深鉢形土器、鉢形土器、注口付土器、台付土器の底部破片を一括する。

住居跡出土石器

住居跡出土石器を一括する。石器組成は磨石類に偏り、剥片石器類は少量である。石剣の欠損品が3点とまとまっている点は注意される。

垂飾（1）

緑簾石片岩製。一端に径1㎜呈の穴を両側から穿つ。

掻・削器（2・3）

2は厚手幅広剥片の端縁に急角度の調整加工を施している。3は厚手幅広剥片の端縁に調整加工を施している。概形は楕円形に近く、刃部を横位置に用いて使用したと考えられる。

石匙（4）

横広剥片を素材とし、上半部の剥離によってつまみ部が作り出されている。端縁の一部に正面方向からの細かい剥離が施されており、刃部加工と思われる。作りは粗いが石匙と捉えておく。

打製石斧（5・6）

5は基部に抉りの入る、いわゆる分銅形の打製石斧である。刃部は円刃である。刃部正面に先端からの剥離面が見られ、側面形が不自然に刃部付近で薄くなることから、再生加工が施されている可能性がある。6は裏面に原石面を残し、加工は周縁から施されている。側面を見ると、刃部が大きく抉れることから、度重なる刃部再生が行われたものと思われる。

石剣（7～9）

横断面の形状から石剣と考えられる。7は先端部を欠損するが、8は上半部を欠損する。9は端部の破片である。

砥石（10～13）

全て有溝砥石である。10・11・13は扁平礫を素材とし、12は厚手礫を素材としている。

凹石（14）

第１表　住居跡出土石器観察表

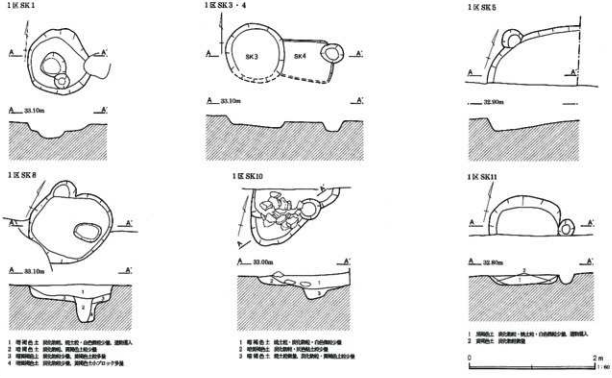
番号	器種	長さ／cm	幅／cm	厚さ／cm	重さ／g	石材	註記
1	垂飾	2.50	0.75	0.35	1.25	緑簾石片岩	１区ＳＪ－１
2	掻・削器	4.60	5.50	1.90	45.74	ホルンフェルス	１区ＳＪ－１
3	掻・削器	5.15	3.90	1.20	25.95	チャート	１区ＳＪ－１－ＳＫ－８－ＳＤ－１
4	石匙	3.00	4.75	0.75	6.21	ホルンフェルス	１区ＳＪ－１一括
5	打製石斧	6.75	4.50	2.20	71.50	ガラス質黒色安山岩	１区ＳＪ－１
6	打製石斧	7.70	6.15	2.60	145.51	緑簾石片岩	１区ＳＪ－１－ＳＫ－８－ＳＤ－１
7	石剣	(10.55)	3.45	2.20	102.95	〃	１区ＳＪ－１　No. 5
8	石剣	(13.50)	3.50	1.35	119.82	砂岩	１区ＳＪ－１－ＳＫ－８－ＳＤ－１
9	石剣	(4.55)	2.65	1.45	25.43	〃	１区ＳＪ－１　No. 5
10	有溝砥石	(5.85)	3.50	0.85	17.55	〃	１区ＳＪ－１
11	有溝砥石	(5.65)	4.10	1.15	25.08	〃	１区ＳＪ－１
12	有溝砥石	(9.25)	7.50	5.35	301.02	〃	１区ＳＪ－１　No. 13
13	有溝砥石	(9.70)	7.85	1.70	137.19	〃	１区ＳＪ－１
14	凹石	(6.95)	7.05	4.95	257.84	安山岩	１区ＳＪ－１　No. 15
15	敲石	8.10	5.25	5.15	313.12	〃	１区ＳＪ－１　No. 11
16	磨石	9.25	6.60	5.10	458.38	泥岩	１区ＳＪ－１　No. 42
17	磨石	(8.05)	6.60	4.40	297.85	砂層岩	１区ＳＪ－１　No. 46

られる。

磨石（16・17）

川原石を用いて、正面平坦部に磨痕が見られる。

第13図　土壙



楕円形の川原石を素材に、正面に凹を有する。

敲石（15）

楕円形の川原石が用いられ、長軸端部に敲打痕が見

（２）土壙

第１号土壙（第13図）

Ａ・Ｂ－９グリッドで検出された。不整楕円形を呈

し、底面にピットが2基掘りこまれていた。覆土は褐色から暗褐色土を主体とするもので鉄分を少量含んでいた。大きさは1.03×0.96mで深さは26cmである。

第3号土壙（第13図）

B－9グリッドで検出された。第1号住居跡、第4号と重複する。第4号土壙より新しい。円形を呈し、底面は平坦である。覆土は暗褐色土を主体とするものであった。直径は0.92mで深さは0.18mである。

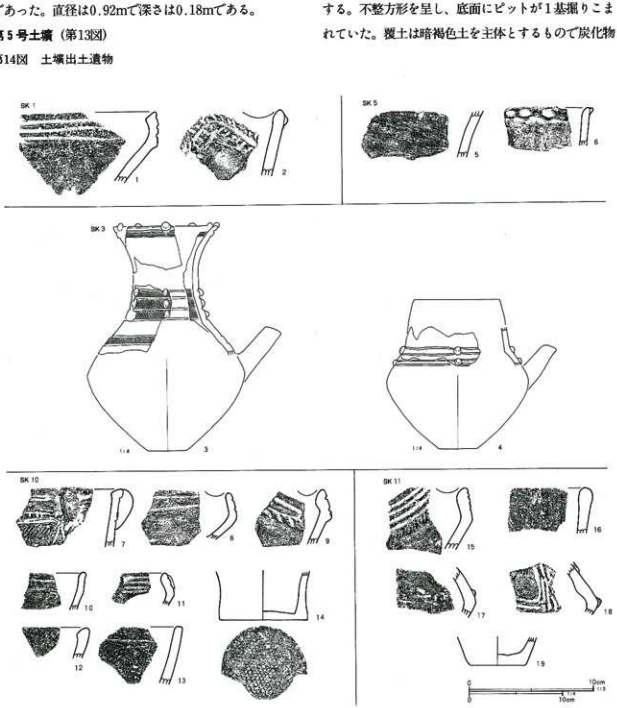
第5号土壙（第13図）

B－9グリッドで検出された。重複はないが大半が調査区外にかかる。楕円形を呈するものと思われる。底面は中央部が高く周辺部が低くなっている。覆土は暗褐色土を主体とするものであった。検出された部分は1.44×0.92mで深さは22cmである。

第8号土壙（第13図）

A－9グリッドで検出された。第1号住居跡と重複する。不整方形を呈し、底面にピットが1基掘りこまれていた。覆土は暗褐色土を主体とするもので炭化物

第14図　土壙出土遺物



を含んでいた。大きさは1.44×1.3mで深さは28cmである。

第10号土壙（第13図）

B－9グリッドで検出された。第1号溝の下から検出された。約半分が調査区外にかかる。楕円形を呈するものと思われる。覆土は暗褐色土を主体とするもので炭化物、焼土粒を含んでいた。また、磨石、凹石などが纏まって出土した。出土状態から一括して投げ込まれたものと考えられる。大きさは1.31×0.91mで深さは18cmである。

第11号土壙（第13図）

B－9グリッドで検出された。第1号住居跡と重複する。半分は調査区外にかかる。円形或いは隅丸方形を呈するものと思われる。底面は平坦である。覆土は黒褐色土を主体とするもので炭化物、焼土粒を含んでいた。検出された大きさは1.10×0.62mで深さは15cmである。

土壙出土土器（第14図）

1は内折する口縁部形態で、地文に無節Lを施し、3条沈線文を施した深鉢形土器で高井東式である。2は山形の波頂部形態をもつ波状口縁の深鉢形で、口縁には刻目文を施し、直下には細く紐状の隆帯が巡り、刻目文を施す。

3は壺形もしくは注口付土器である。強く外反する口縁部形態で、口縁には5単位構成と思われる小突起を配置する。肥厚する口縁には地文として単節LRの縄文を施し、突起間に1条沈線文を施す。頸部には、施文順位として貼付文、地文縄文、沈線文の工程により区画する3段の縄文帯を設ける。肩部にも縄文帯が横走する。4も恐らく注口付土器で、頸部から肩部にかけての部位である。肩部にはイボ突起の貼付によって器面を4単位に分割し、貼付文を起点とする2条沈線文が横帯区画を設ける。

5は外反する口縁部形態をもった深鉢形の体部上半の破片で、器面には斜行する調整痕を残す。6は直線的に広がる口縁部形態をもつ薄手の深鉢形で、口縁端部には細かな圧痕文が連なる。安行式とは系統を異にする土器である。

7は扁平で縦長の貼付文を口縁に配し、沈線による横位区画内には細かな刻目文を施すもので、弧線文が連結する口縁部文様帯をもった平口縁の深鉢形土器である。曽谷式土器である。8は曲線的に内折する波状口縁の土器で、口縁には2条の沈線文を施す。高井東式である。9は波状口縁をもった深鉢形で、波底部に近い口縁部の破片である。「く」の字状に内折する口縁部には沈線文を楕円状に施し、屈折部に斜方向に連なる刻目文を施す。高井東式土器である。10は平口縁の深鉢形で、直立した口縁には1条の沈線を施文する。11は内折した口縁部形態を呈す鉢形土器で、ボタン状の貼付文と4条沈線文を施す。12、13は、無文の深鉢形である。12は内湾する口縁が肥厚する。13は外傾する口縁部形態を呈す。14は底部で網代痕を残す。

15は内折する口縁部に無節Lを地文に、4条の沈線文を施す波状口縁の深鉢形土器。16は丸味を帯びる口縁端部が直立する形態を呈す無文の土器である。17は内折する口縁部形態で、屈折部には瘤状の貼付文を施す。内面の丁寧な調整痕から鉢形土器と思われる。18の内面には、整形段階の荒れた面が見られ、壺形もしくは注口付土器と思われる。肩部には上下に配置された貼付文と縦位の沈線文によって器面が分割され、屈折部の横位沈線により方形区画を設け、区画内には枠状に沈線文を施す。19は深鉢形の底部破片である。

（3）包含層出土土器

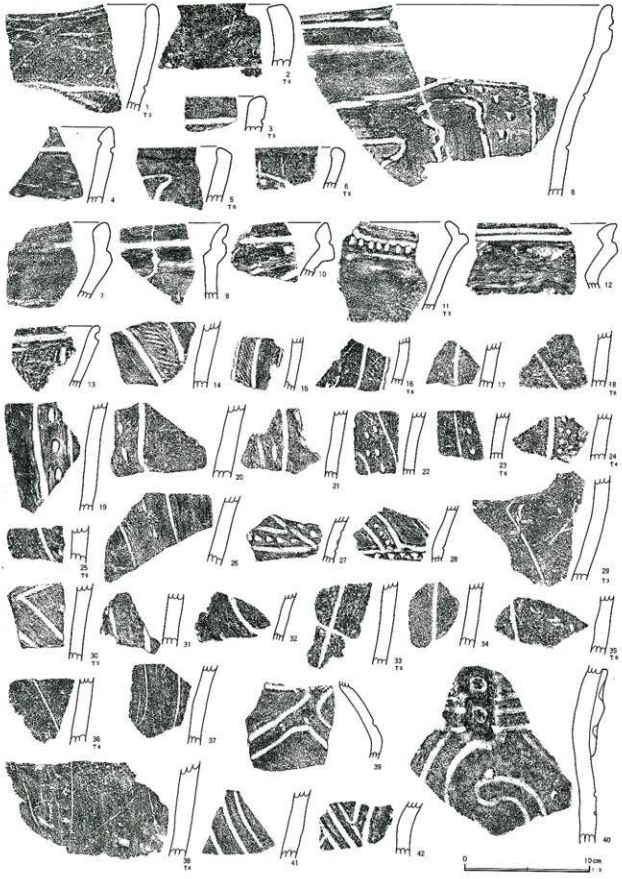
包含層出土土器

調査区から出土した縄文土器は、後期前葉から晩期のもので、その大部分は調査2区において集中的に検出されたものである。

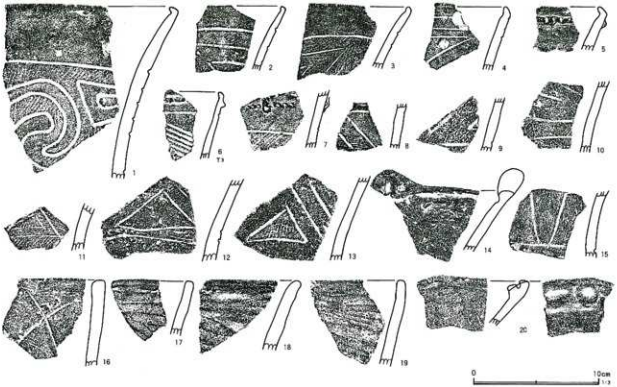
第Ⅰ群土器（第15図1～42）

後期前葉の称名寺式土器である。全体的に新しい段階の特徴をもつもので構成する。

第15図　包含層出土土器（1）



第16図　包含層出土土器（2）



a（1～13）

深鉢形土器の口縁部を一括する。1、2は内湾気味の口縁部形態で、口縁部には無文域を幅広く設けて、横線文を施している。3、4は外傾する口縁部形態を呈し、口縁直下に太い横線文を施す。5、6は口縁部が外傾し直線的に立ち上がる形態で、曲線的な沈線文を施す。6の沈線間には刺突文を施している。7～13は屈折する口縁部形態で、口縁に沿って沈線文を施す。7は口縁に太い沈線文を施す。8は崩れたモチーフ内に刺突文を施している。10～12は口縁部が内折する形態のもので、口縁に沈線文を施す。10は1条の沈線文が巡る。11は屈折部に列点状の刺突文を施す。12は短頸の深鉢で、口縁に2条沈線文が巡る。13は口縁に沿って沈線文が巡り、体部には地文縄文上に縦位の沈線文を施した堀之内式系土器である。

b（14～42）

深鉢形土器の胴部破片を一括する。14～18は沈線文間に充填縄文を施すものである。縄文原体は全て単節RLで縦位方向に施している。19～28は沈線区画内に刺突文を施すもので、刺突施文具にバラエティーが見られる。19～21は区画内に米粒状の刺突文を単列に施している。22～25は円文状の刺突文を施すものである。22は複列に施す。24は円文状の刺突文を充填施文している。26は垂下する沈線文間に楕歯状の施文具による刺突文を施す。27、28は間隔の狭い沈線間に短線状の刺突文を施す。28は括れ部の横位区画帯に刺突文を施している。29～42は沈線文を施した胴部破片である。29～35は太い沈線文によってモチーフを描く。36～38は細く力強さに欠けた沈線文を施す。39、40は並列する太い沈線文により文様を描く。39は膨らむ形態の胴部に「J」字状の連結文様を施している。40は胴部下半が張る形態の深鉢で、括れ部には「8」字状の貼付文を配し、横位沈線文が3条巡る。胴部には貼付文を起点として「J」字状沈線文を施す。41、42は太い沈線文の集合が見られる。

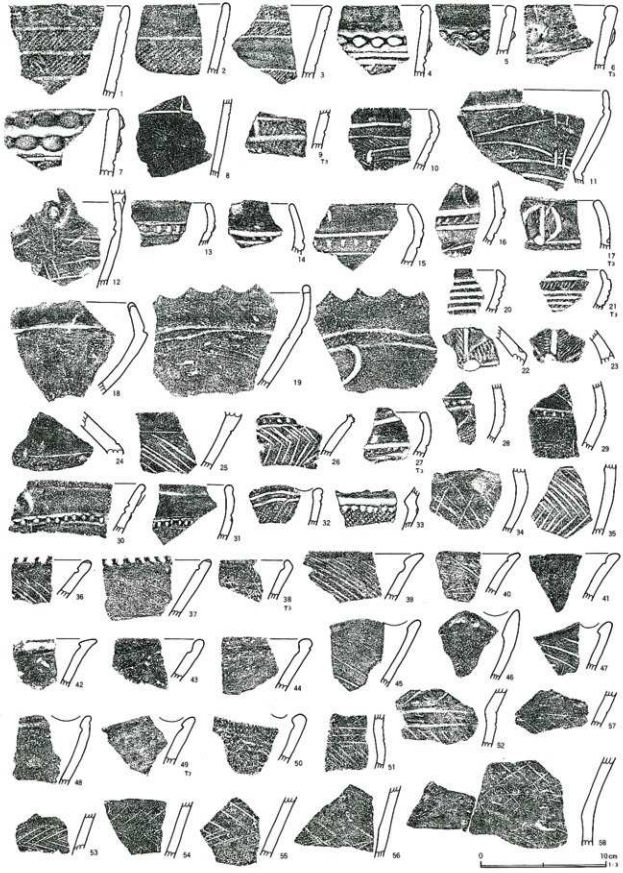
第Ⅱ群土器（第16図1～20）

堀之内2式土器を一括する。

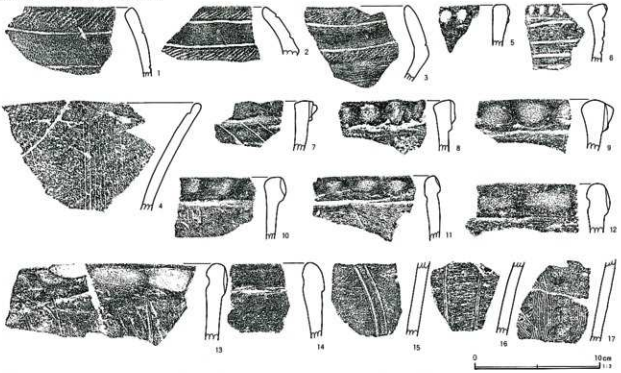
a（1～4・8～13）

口縁部が朝顔状に外傾する深鉢形土器で、体部に横位文様帯をもつものである。1は横位文様帯に2条沈

第17図　包含層出土土器（3）



第18図　包含層出土土器（4）



線文が上下に交差した入組文と三角文を施文している。縄文は単節ＲＬを施す。２～４は口縁部で、横位文様帯内には、三角形を基本とした磨消縄文を施す。８～13は磨消縄文手法で同様な文様構成をもつ胴部破片。

ｂ（５～７）

口縁に刻文列を加えた隆帯文を施す深鉢である。5は内折する口縁をもつ。６は横位区画内に条線化した斜行沈線文を施している。７は「８」字状の貼付文を配す。単節ＲＬを施文した縄文帯を施す。

ｃ（14～20）

その他の土器を一括する。14は外反する口縁と膨らむ胴部形態をもつ深鉢で、口縁部を無文とし、口唇部には捻れた突起を配す。15、16は沈線文を格子目状に施すものである。15は横位区画文に施している。16は区画文が開放された格子目文を施した直立気味の口縁部をもつ深鉢形土器である。17～19は外傾した口縁部をもつ深鉢形で、器面にナデ整形痕を強く残す土器。20は浅鉢形土器である。口縁内面が肥厚し、盲孔の円文を起点とした太い１条の沈線文が連結する。古手の様相を残す。

第Ⅲ群土器（第17図１～58、第18図１～17）

加曽利Ｂ式土器を一括する。

第１類（第17図１～９）

平口縁の深鉢形土器で、底部付近から外傾して直線的に立ち上がる形態のものを一括する。

ａ（１～３、８、９）

平行横線文で区画した縄文帯を施すもの。1は横位区画帯が多段で構成する。２は幅広の縄文帯を設ける。３は無文帯を挟んで幅狭の縄文帯を施している。８、９はこの類の胴部破片で、８は右送りの縦線文を施す。９は区切り縦線文を施している。

ｂ（４～７）

半精製系の土器で、口縁部には圧痕を施す紐線文が巡り、体部に平行横線文による横帯区画を施す。４～６は口縁部に無文域を幅広く設け、紐線文を１条施す。太い沈線文が横線区画を施している７は口縁に接して２条の紐線文を施す。内文に沈線が巡る。

第２類（第17図10～12・26・30～35）

精製の深鉢形土器で、胴上半部に括れ部をもつ形態のものを一括する。

ａ（10～12）

口縁に３単位の把手を有す深鉢形土器で、体部上半

に弧線文系の文様を施す。10は弧線文系の連結部に縦線文を施し、沈線区画内に縄文を施す。11は上下に弧線が菱形状モチーフと連結部に対弧状の短沈線を施す。12は直線的な沈線文と連結部に縦線文を施す。

b（26、30、31）

口縁の3単位把手か退化的な突起状を呈し、口縁部が外傾する形態を示す深鉢形土器である。30は直線的に外傾する口縁部で、口縁直下には沈線による横帯区画と列点文を施す。突起下には縦線文が見られる。内文に沈線文を施す。31は直立気味の口縁部である。26は体部破片で、矢羽根状沈線文を施す。

c（32～35）

その他の精製系の深鉢形土器を一括する。32は波状口縁形態の土器で、口縁に沿って2条沈線文を施し、縄文帯が接する。33～35は体部破片である。33は括れ部に太い沈線文を施し、体部下半には縄文地に円状の列点文か巡る。34、35は斜行沈線文を施した精製系土器である。

第3類（第17図13～17、27～29）

内湾する口縁部形態をもつ深鉢形及び鉢形土器で、体部文様に弧線文を施すものを一括する。

a（13～17）

口縁には幅広の無文部を設け、沈線文による横帯区画に列点文を施すもの。15～17の無文部には対弧文系の単位文を施し、体部にも弧線状の沈線文を施す。

b（27～29）

口縁部に弧線文を施すもの。口縁部の横帯区画文に接し、口縁に下向き弧線文が連続する。28の体部には縄文施文をもった弧線文を施している。29は体部に対弧状の縦線文を施す。

第4類（第17図18～21）

鉢形土器である。

a（20、21）

底部から外傾して直線的に立ち上がる形態のもの。20は多条沈線による横帯区画文を施す。区切沈線文が見られる。21は横帯文と多条沈線文を施している。

b（18、19）

外面が無文で、口縁が小波状の形態のものである。18は口縁部がくの字状に内折する。19は内文として「の」の字状に沈線文を施す。

第5類（第17図22～25、第18図1～3）

算盤玉状の形態を有す鉢形土器である。

a（第17図22～25）

22、23は肩部に下向きの弧線文を施し、連結部には円文と区切沈線文を施す。24は屈折部に縄文帯を設ける。25はこの類の体部破片で、横線区画内に斜行沈線文を施す。

b（第8図1～3）

内折する口縁部に2条の横線文を施し、無文部を挟んで縄文帯が巡る。

第6類（第17図36～40、45～47、51～58）

斜行沈線文を施す深鉢形土器を一括する。

a（36、37）

平口縁で括れ部を有す半精製系の土器。36は口唇部に刻目文を施している。37は羽状沈線文を施す。

b（38～40）

外傾の強い口縁部形態の粗製系の土器である。39は条線状の沈線を施す。40は崩れた矢羽状の沈線文を施している。

c（45～47）

波状口縁で5単位構成の深鉢形土器。内削り状の口唇部を有す。45は山形に尖る波頂部をもつ。

d（51～58）

この類の括れ部、胴部破片を一括する。51、52は括れ部に沈線が横帯区画を設け、斜行沈線文を施す。53～56は矢羽状沈線文を施す。57、58は格子目状に施している。

第7類（第17図41～44・48～50）

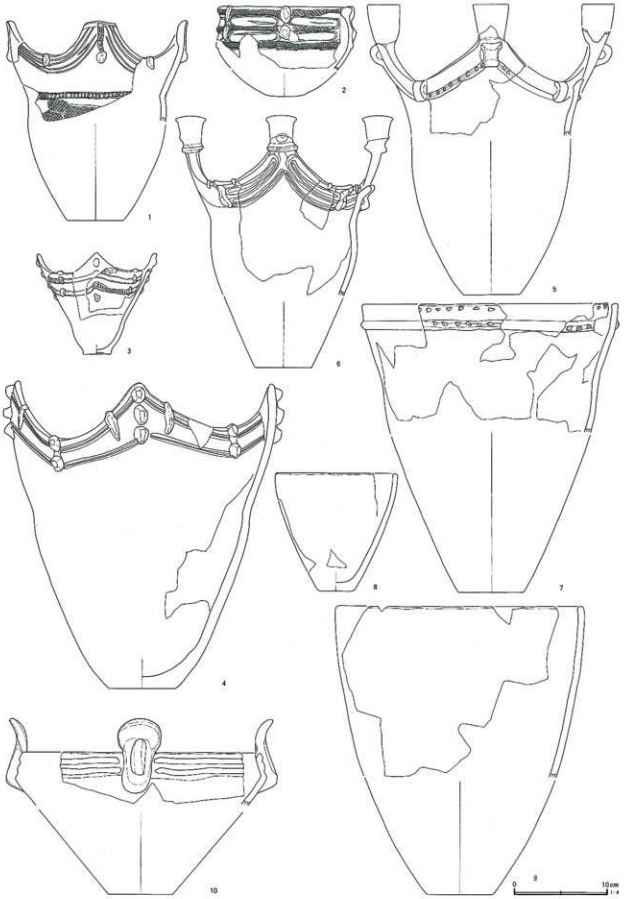
口縁部が無文の深鉢形土器を一括する。

a（41～44）

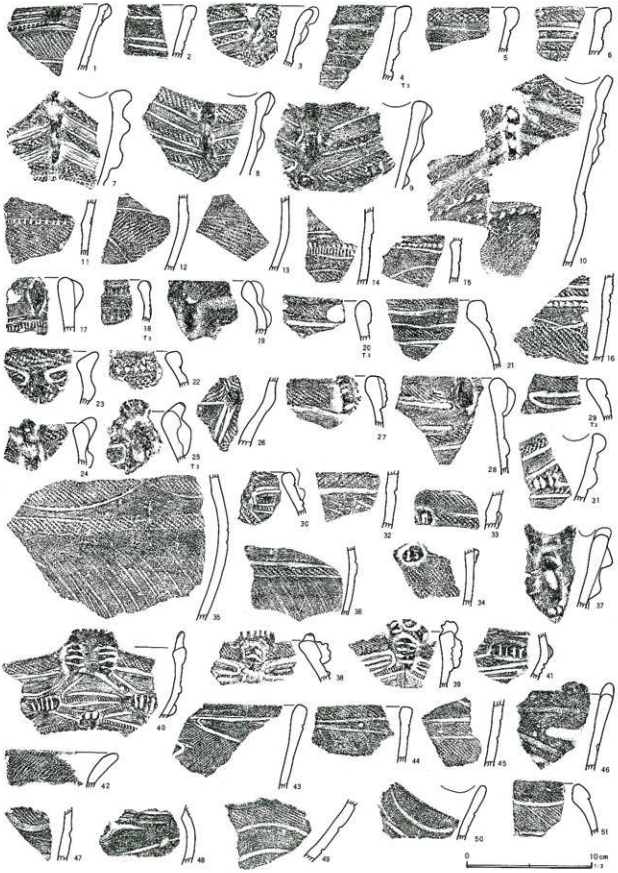
口縁部が外反し括れ部を有す平口縁の深鉢である。41、42は器面に研磨を施した精製系土器である。42、43の器面には斜行する擦痕を残す。

b（48～50）

第19図　包含層出土土器（5）



第20図　包含層出土土器（6）



波状口縁の深鉢で、恐らく５単位構成の土器である。

48は内湾する口縁部形態で、研磨を施し光沢のある器面をもった精製系土器である。49、50は外反する形態のもので、器面に擦痕を残す。

第８類（第18図４～17）

粗製系の深鉢形土器を一括する。

ａ（４、15～17）

条線文を施す土器である。４は外傾する口縁部をもつ深鉢。器面に擦痕を残し、櫛歯状の施文具により縦位に条線文を施す。内文に１条の沈線が巡る。15～17は条線状の沈線を縦位方向に施した胴部破片である。

ｂ（５～14）

紐線文系土器で、いくつかのタイプの土器を含む。

５は口縁に沿って円文状の圧痕文を施す。６は内湾する口縁に圧痕文が巡り、横走する沈線文を施す。７は口縁及び胴部上半に紐線が巡り、区画内には斜行沈線文を施す。８～13は直立気味の口縁部形態を有す厚手の土器で、口縁に沿って指頭圧痕を長めに施す幅広の紐線文が巡る。体部には擦痕を残す。11～13は内文として太い沈線を施す。北関東系の紐線文土器である。

第Ⅳ群土器（第19図１、第20図１、11～13）

曽谷式土器を一括する。

第19図1は、4単位の波状口縁の形態をもった深鉢で、波頂部は台形状を呈す。波頂部には刻目文を施した紐状の貼付文が垂下し、小突起と接続する。波底部にも瘤状の突起が配置されている。口縁部には４条の沈線文が施されている。括れ部には刺突列を施した沈線文が区画する。胴部には横走する沈線文が見られ、原体ＲＬの縄文が施されている。第20図1は平口縁の深鉢で、肥厚した口縁には瘤状突起を配し、多条の沈線文と刺突文を集約的に施しており、接続する縄文帯によって幅狭の口縁部文様帯を構成している。第20図11～13は恐らくこの群と思われる胴部破片である。11は括れ部に１条の沈線文と刺突列を施し、縄文施文域と接続する。12は直線的な沈線文による区画内に原体ＲＬの縄文が施されている。13は鋭く施された弧線区画内に原体ＬＲの縄文が施されている。

第Ⅴ群土器（第19図２、第20図２～10・14～51、第21図28～51、第24図22～31）

安行式土器を一括する。

第１類（第19図２・第20図２～10・14～26）

安行１式の精製土器を一括する。

ａ（２～６、17）

口縁部が外傾する平口縁の深鉢形土器である。２は沈線区画で縄文間の削りが浅く隆起帯が低い。安行１式成立段階の土器である。３～６は隆起帯縄文が３段構成のもので、３は２段に突起を配している。縄文は全て原体ＲＬを施す。17は横線区画内に刺突文を施すもので、瘤状突起を配す。

ｂ（７～10）

波状口縁の深鉢形土器である。７は山形の波頂部形態をもつもので、３段の隆起帯縄文には瘤状突起を配す。隆帯間には並列した沈線文を施す。８は波底部で、隆起帯縄文には２段の瘤状突起を配している。９は波底部破片。隆起帯縄文及び瘤状突起が３段構成のもので、隆帯間の沈線文が枠状に連結している。10は波頂部下に圧痕文を施した縦長の貼付文が垂下し、３段構成の隆帯文と幅広の凹線区画が連結する。括れ部にも凹線区画帯を設けており、両端には三角状刺突文列を施している。隆起部及び胴部には無節Ｌの縄文を施す。北関東的な要素の強い安行１式土器である。

ｃ（18～21）

口縁部が内湾する形態の深鉢形土器である。18は沈線区画内に刺突文列を施す。19は幅広の凹線状の沈線文により無文部を構成し、２段の瘤状突起を施している。20、21は幅広の隆起帯縄文を施すもので、縄文は単節ＬＲを施している。

ｄ（第19図２、第20図22～26）

鉢形土器などを一括する。第19図２は、内湾する口縁部形態のもので、３段構成の隆起帯縄文には６単位で配された瘤状突起を２段に施している。隆帯間には沈線文が枠状に施される。22は帯縄文間に細かい三角状の刺突文列を施す。23～25は、隆帯間に施される沈線が枠状文になるもので、23の口縁部には突起を施し

ている。24、25には2段突起を施す。26は隆起帯縄文が縦位に分岐する構成をとる土器。

e（第20図14～16）

恐らく波状口縁の深鉢の胴部破片。14～16は括れ部に刺突文列を施し、胴下半部には弧線文を施している。

第2類（第20図27～39）

安行2式の精製土器を一括する。

a（第20図31、37）

波状口縁の深鉢形土器である。31は隆起帯縄文が三角文を構成し、連結部に豚鼻状貼付文を施す。37は波頂部に縦長の貼付文と豚鼻状貼付文を施している。

b（第20図27～29）

内湾する口縁の深鉢形土器で、口縁が扁平な形状を示す。27は縦長瘤に刻目文を施している。28は瘤状突起と幅広の隆起帯縄文が施されている。29は沈線文が楕円状に施され、上下の隆帯文の連結が見られる。

c（第20図32～36）

深鉢形土器の胴部破片を一括する。32～34は、波状口縁をもつ胴部破片で、横位区画帯や条線文が施され、33、34に豚鼻状の貼付文が配されている。35、36は半粗製系の胴部破片で、胴下半部の区画帯と条線文が施されている。35には弧線文が見られる。

d（第20図30、38、39）

口縁部が内湾する鉢形土器である。30は隆起帯に刻目文を施すもので、口縁に接して2段突起を配している。38は口縁に突起を配し、隆起帯が三角文を構成する。39は枠状文を施す。

第3類（第20図　40、41、44～51）

晩期安行式を一括する。

a（40、41、44～49）

安行3a式である。40は鉢形土器で、口縁には台形突起の両端に横位刻文を施す縦長瘤を配し、隆起帯が菱形状文様を構成する。各連結部には貼付文を配している。41は相似形態の土器で、横長の貼付文を施す。44～47は平口縁の深鉢形土器と思われる。口縁部は外傾して立ち上がる形態で、扁平な口縁には縄文帯を設けている。46は口縁に突起を配し、縄文区画帯を設け、無文部に彫刻的な三叉文を施す。47は弧線文をもつ胴部破片。48は膨らみをもつ胴部に三叉文を施している。49は弧線文を施す浅鉢形土器である。

b（50、51）

安行3b式である。50は波状口縁の深鉢形土器。外傾する口縁には弧線区画内に縄文を施している。51は内湾する平口縁の深鉢形土器で、横線文間に細密沈線文を施している。

第4類（第21図　28～46～51、第24図22～31）

紐線文系の粗製深鉢形土器を一括する。

a（第21図28～42、50、51）

口縁部及び胴部上半に、刺突文列、横線区画、条線文を施す土器である。28、29は内湾気味の口縁部形態で、三角状刺突文が巡る。器面には斜行する条線文を施す。43は胴部破片で、条線文を縦位に施している。30、31、34～38、41、42は連続刺突文と横線区画を施す。30、31は内湾気味の口縁部形態で、整然とした条線文を施している。34～38は肥厚する口縁をもち内湾度の強い形態で、斜行する条線文を施す。41、42は爪形状の刺突文を施す土器。41は内湾の強い形態の口縁部で、体部の横線区画を上位に設ける。細密な刺突文を施している。体部は無文である。42は条線文を施す。43～45、50、51は胴部破片。43は三角状刺突文が巡る。44は横線区画と刺突文を施す。45は条線文を施した胴下半部。32、33は口縁に横線区画を設ける土器。39は外傾する口縁に横位条線文を施す。40は内湾する口縁部に条線文を施している。

b（第21図46～49）

紐線文を口縁及び胴上半に貼付する土器である。46、47は口縁の肥厚が見られる。49は縦位に紐線文が貼付され、条線文を施す。

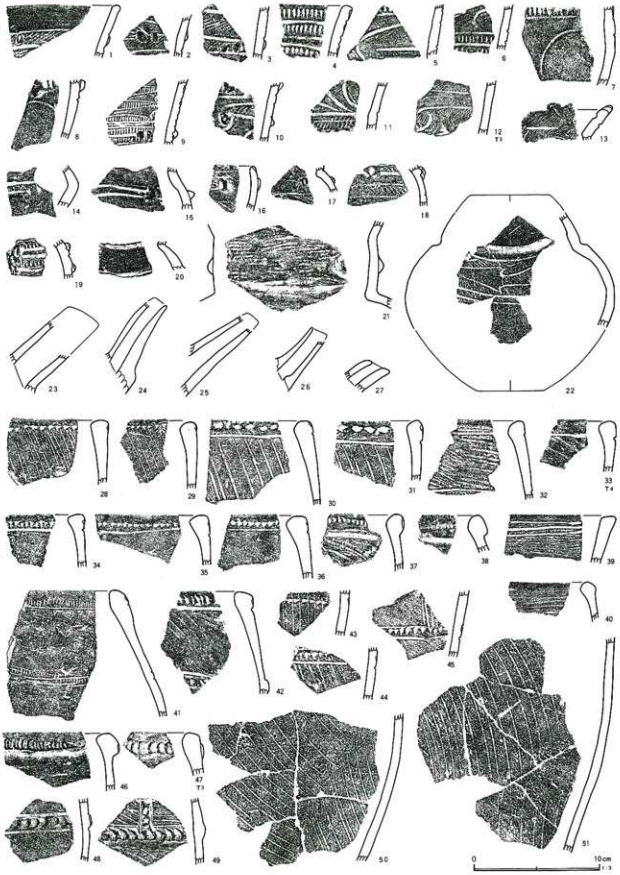
c（第24図25～30）

紐線文系の無文土器で、口縁が肥厚し内湾する口縁部形態の土器。

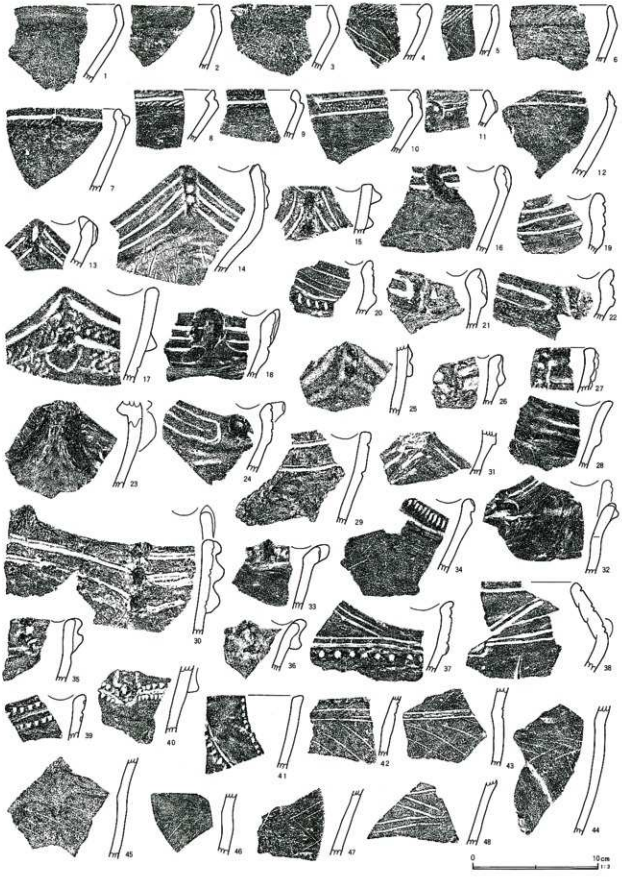
d（第24図　22～24、31）

器壁が薄手で、口縁部が内湾する形態をもつ土器。22～24は非常に薄手で、口縁部が内湾する形態をも

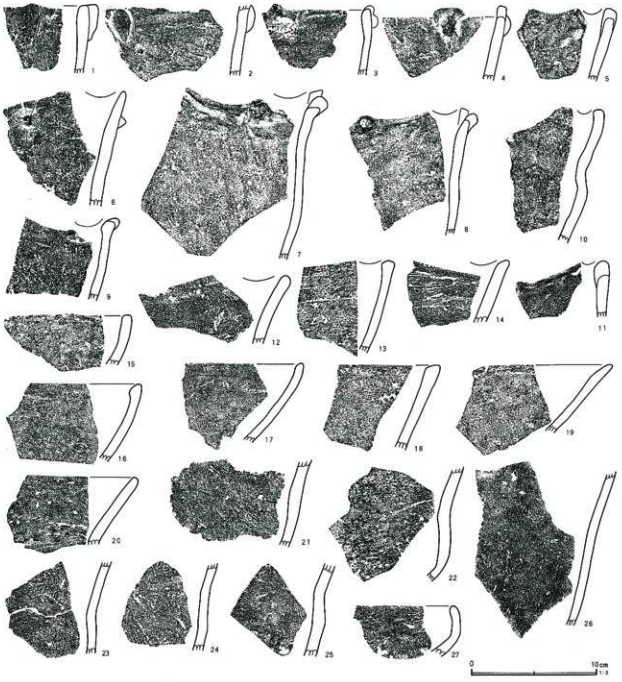
第21図　包含層出土土器（7）



第22図　包含層出土土器（8）



第23図　包含層出土土器（9）



ち、器面に輪積み痕や擦痕を残している。31は折返し口縁を施す。北関東的な晩期前半の土器である。

第Ⅵ群土器（第19図3～10、第22図1～48、第23図1～27、第24図1～20）

後期後半の曽谷式から安行式に併行する高井東式及び高井東式系統の土器を一括する。

第1類（第22図1～16）

「く」の字状に屈折する口縁部が特徴的な形態の深鉢形土器を一括する。

a（1～6）

平口縁の土器で、内折する口縁部が無文のものと縄文を施文した土器である。1～3は内折する口縁部が無文のもので、1の体部には斜行沈線文を施している。4～6は口縁部に縄文施文が見られ、原体は無節Rを

施す。体部には斜行沈線文を施している。

b（7～12）

平口縁の土器で、内折する口縁部に沈線文を施す土器である。7～9は縄文地に1条の沈線文を施す。7にはイボ状の貼付文を施している。10～12は無節Rを施文し、縄文地に2条の沈線文を施す。10、11にはボタン状の貼付文を施している。

c（13～16）

口縁部が4単位の波状形態になる深鉢形土器で、口縁部が内折する形態のものを一括する。13、14は山形状の波頂部に縦位区切文を配し、沈線文が巡る。口唇部にイボ状の突起を施す。15は台形状の波頂部形態で、2段突起を施す。16は波底部の破片で、耳状の貼付文と2条の沈線文を施す。

第2類（第19図10・第22図18～28）

第1類と同様に口縁部がくの字状に屈折する形態であるが、屈折部が有段状で口縁部へ移行する形態を特徴とし、括れ部を胴上半に有す深鉢形土器を一括する。

a（18～20）

円柱状突起を4単位にもつ口縁で、波底部に貼付文を施した深鉢形土器である。口縁部に沈線文を施す。18は耳状の貼付文を波底部に施し、3条の沈線文を波頂底間に施す。19は3条沈線を施文する。20は屈折部に刻目列を巡らし、沈線文を施す。

b（21～24）

突起状の波頂部を4単位にもつ波状口縁の深鉢形で、波頂底間を分割する貼付文を施す土器である。21～24は楕円状の沈線文を施すものである。21は波頂底間を分ける貼付文を施した破片。22は波底部破片で、刻文をもつ貼付文と楕円状沈線文を施す。22は波底部の口縁にボタン状の突起を配し、楕円状区画内に沈線文を埋めている。23は有段の屈折部が耳状に隆起した波頂部下の破片である。

c（第19図10、第22図25～28）

太い凹線状の沈線文を口縁部に施す土器を一括する。25は4単位の波状口縁の深鉢形で、瘤状貼付文と、2条の凹線が見られる。26、27は恐らく平口縁の深鉢形土器と思われる。円形圧痕文を加えた縦位貼付文が口縁部を分割し、2条の凹線状沈線文が巡る。第19図10は鉢形土器である。「く」の字状に屈折する口縁部には突起を配し、凹線状沈線文が巡る。突起には内文として円形圧痕文を施す。

第3類（第19図3・4・6、第22図29～32・35・36・38）

口縁部形態が、体部から直線的に立ち上がる特徴で括れ部の収縮が緩い深鉢形土器を一括する。

a（第19図4、第22図29、30）

口縁部に沈線文を施すものを一括する。第19図4は山形の波頂部をもつ波状口縁の深鉢形土器である。波頂部及び波底部に突起を配し、口縁波頂下にも縦位貼付文を施して器面を分割する。口縁部には半裁竹管状の施文具による平行沈線文が突起間を連結する。29、30も同様の口縁部破片である。

b（第19図3）

紐線状の隆帯文を施すもの。恐らく山形の波頂部をもつ波状口縁で、底部から緩く膨らむ胴部は括れ部から直線的に外傾する口縁部を有す深鉢形土器である。口縁部には複列の紐線状隆帯を施し、隆帯上には細かい刺突と刻文が見られ、小突起を要所に施す。波頂部にも細かい刺突文を施している。

c（第19図6）

口縁部に枠状の隆帯文を施す。円柱状の突起には瘤と鉢巻状の貼付文を配し、波底部に2項瘤を縦位及び瘤両端の口縁に小突起を配した波状口縁の深鉢形土器である。口縁部には隆帯文が巡り文様帯を区画する。区画内も隆帯を枠状に施し、凹線状の無文帯を2段設ける。波頂底間の口縁の外折形態が特徴的である。

d（第22図31・32、35・36・38）

31は突起部を欠損する波頂部破片で、狭い口縁部文様帯に1条の沈線文を施す。32は口縁部の文様区画が希薄な波状口縁の土器である。口縁には半裁竹管状の施文具による平行沈線文が波頂部及び波底部の耳状貼付文間に巡らす。口縁の外折形態が特徴的である。35、36は狭い口縁部に突起と平行沈線文を施した波底

部の破片。38は鉢形土器である。口縁に沿って1条沈線文、屈折部には貼付文と並列する沈線文が区画帯を設け、並列沈線文を斜行させる。

第4類（第19図5、7、第22図37）

口縁部の文様帯が刺突列を施した隆帯文で区画するものを一括する。第19図5は杯状の突起をもつ波状口縁の深鉢形土器である。波頂間の口縁は外折気味の形態が見られ、波頂部下に橋状の突起を配している。隆帯は断面が三角状に尖り、刺突列が巡る。口縁は無文帯である。第19図7は直立気味の口縁で、体部上半に緩い括れ部をもつ平口縁の深鉢形土器である。隆帯上には刺突列が、口縁に沿っても刺突文を施している。第22図37は恐らく山形状に突出する波頂部形態の波状口縁深鉢である。口縁部は外傾する体部から屈折して直立する形態である。区画された文様帯には、隆帯文に沿って半裁竹管状の施文具による平行沈線文が巡り、突出する口縁に沿っても沈線文を施している。

第5類（第22図33～34、39～41）

刺突文を施す深鉢形土器を一括する。

a（33～34）

34は口縁端部を肥厚させ、体部側から削り込んで突出させる形状が見られ、突出部に刻文を施す波状口縁の土器である。33は有段状の突出部に瘤状突起を配し、「C」字状の刻文が巡る波底部の口縁部破片。

b（39～41）

沈線文、刺突文を併用して施す土器を一括する。39、40は波状形態の深鉢形土器と思われる。沈線文を挟んで角頭状の刺突文が並列する。40は突起状の貼付文を施す。41は弧線文に単列の刺突文が並列する。異系統の土器と思われるが本群に含める。

第6類（第22図42～48）

この群の斜行沈線文を施した胴部破片を一括する。42、43は括れ部に沈線が横帯区画を設け、斜行沈線文を施す。44は羽状沈線文を施す括れ部の破片。45、46は斜行沈線文を施す。47、48は並列する沈線文を稲妻状に施す体部破片である。

第7類（第23図1～27）

この群に含まれる半粗製系の無文土器を一括する。

a（第23図1～4、15～20、27）

平口縁の土器を一括する。1～4は深鉢形土器で、口縁部に突起を配す。1は直立する口縁部に縦長瘤を施している。2は口縁を欠損するが、瘤状の突起が見られる。3は内折気味の口縁部形態で、口縁に小突起を配す。4は口縁に扇状突起と瘤状の突起を配している。15～20は口縁部の外傾度に強弱をもつ鉢形土器を一括する。器面には整形時の擦痕を粗く残す。27は内折する口縁部形態をもつ鉢形土器である。

b（第23図5～14）

波状口縁の深鉢形土器を一括する。5は波頂部。6は波頂部下に小突起を施す。7～9は外傾する波底部にボタン状の突起を配し、体部の収縮の緩い形態で、第3類dに相似する土器である。10は体部の収縮が強く、外傾気味に立ち上がる口縁部をもつ。11は口縁に小突起を配す。12～14は緩やかな波状口縁の形態を有す。器面には輪積痕と擦痕を粗く残している。

c（第23図21～26）

深鉢形土器の括れ部の破片である。収縮度の強弱と口縁部の開きにバラエティーが見られる。器面には整形時の擦痕を粗く残す。北関東的な土器である。

第8類（第19図8、9、第24図1～20）

粗製系の無文深鉢形土器を一括する。

a（第19図8、9、第24図1～9）

口縁部が直立するか外傾する形態で、厚手の土器であり、器面には整形時の擦痕を粗く残す。北関東的な後期後半の土器である。

b（第24図10～20）

口縁が内折気味の形態で、内外面に輪積痕が部分的に見られ、器面には擦痕を粗く残している。

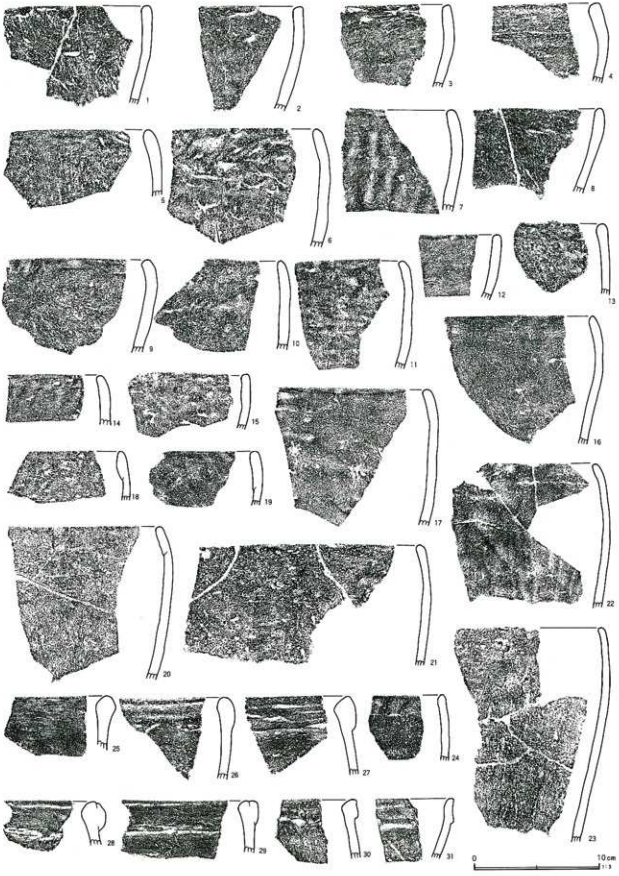
第Ⅶ群土器（第21図1～27）

東北的な後期後半から晩期にかけての瘤付系及び大洞系土器を一括する。

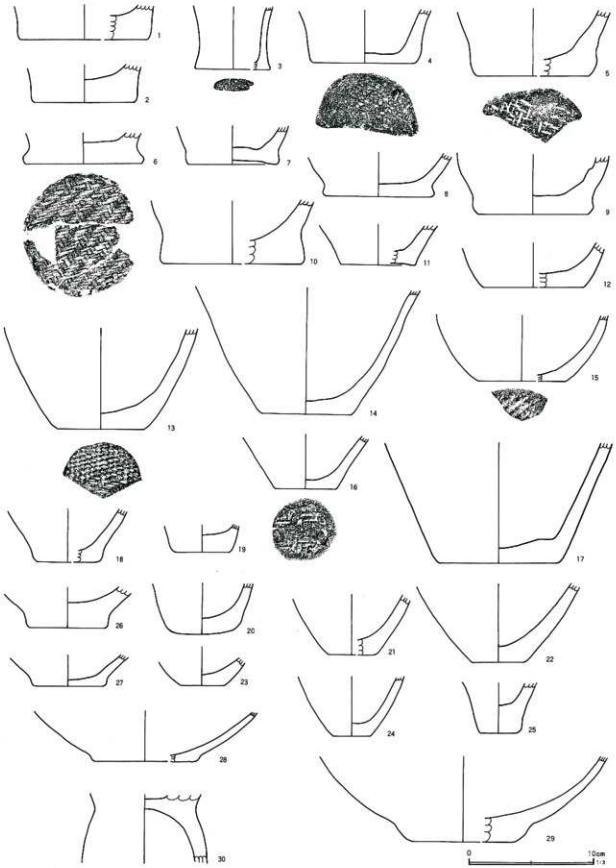
第1類（第21図1～10）

後期後半の土器である。1～3は磨消縄文を施した横帯文をもつ深鉢形土器である。1は外傾する口縁に

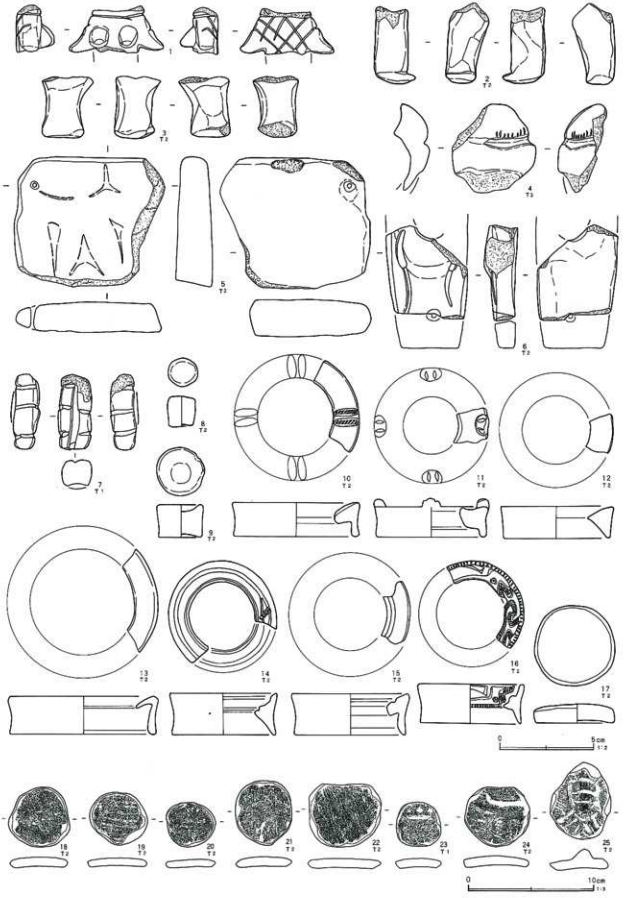
第24図　包含層出土土器（10）



第25図　包含層出土土器（11）



第26図　包含層出土土製品



幅広の無文部をもち、横帯文には2個一対の貼付文を施す。2は横帯区画内に2個一対の貼付文を起点に弧線状の沈線を施す。4～8は刺突文と弧状沈線文を施した深鉢形土器である。4は口縁に沈線区画を施し、縦長の刺突文を充填している。5、6は口頸部の横帯区画内に縦位入組文を施す。7、8は横帯文に貼付文を配し、下向きの弧線文を施した胴部破片。9、10は口頸部の文様区画内に入組文を施す深鉢形土器である。9は連結的な入組文が重畳し、細密な刺突文を充填する。横帯区画内には2個一対の貼付文を施す。10は縄文施文をもつ入組文の結合部に貼付文を施している。

第2類（第21図11～13）

晩期前半の土器を一括する。11、12は三叉文を施した深鉢形土器である。11は横帯区画と入組文が見られ、無文域に三叉文を施す。12は入組文結合部に彫刻的な三叉文を施す。13は口唇部に「B」字状突起を配す。外傾する口縁部には縄文帯に横線文を施す。内文として沈線が巡る。

第3類（第21図14～27）

後期後半の壺形及び注口付土器を一括する。14、15は並列の沈線文を多段に施すもの。16～18は縄文帯で構成するもの。16は横帯区画と貼付文を施す。17は横帯区画と弧線系で構成する。18は横帯区画を多段に施す。19は沈線を多段に施した横線区画に刺突文と小突起を施す。21は無節Rの縄文を施文し、瘤状の突起を施す。20は頸部が無文である。22は口頸部が無文で、肩部の区画内に木の葉状の弧線文が連続する。

23～27は注口部で、この類に含めて一括する。

第Ⅷ群土器（第25図1～30）

後期から晩期の深鉢、鉢、浅鉢、注口付土器の底部及び台付土器の脚部を一括する。

包含層出土土製品

土偶（第26図1～4）

1～3は山形土偶である。1は上半身で、両腕及び乳房が表現される。頸部には沈線が、背面は肩部からの斜行沈線文が格子状に施されている。2、3は脚部で、共に左脚である。4は恐らく中空土偶の上腕部と思われる。太い沈線と連続刺突文を施す、

土版（第26図5）

全体に摩耗が強いため、文様は不明瞭だが、三叉状の沈線文が部分的に読み取れる。裏面は無文のようである。小孔を穿っている。

手燭形土製品（第26図6）

器部に向かって大きな円孔を設け、把手部には小孔を穿っている。表面には太い沈線文を弧状に施す。裏面は無文で、調整痕を残す。

土錘（第26図7）

揚子江型の多溝土錘で、全体に研磨を施す。

耳飾り（第26図8～16）

8は耳栓状の形態で、9は臼型である。共に後期中葉頃のものであろう。10は貼付文、11は突起文を施す。12～13は無文。14、15は彫刻的な三叉文と沈線が連結する。16は彫刻的に文様を施すもので、三叉文と入組文、細かい刺突が見られる。

土製円盤（第26図17～25）

17は整った円盤形の土製品で、全体に研磨を施す。径4、2cmを測る。18～25は土器片を利用し、周囲を打ち欠き円形に整えたものである。18～22は斜行する条線文が認められる。23～25は口縁部を用いており、23は組線文土器、25は安行2式土器である。

包含層出土石器

包含層出土の石器を一括する。石器の所属時期は、明らかでないものもあるが、概ね出土土器に対応し、縄文時代後期から晩期に帰属するものと考えられる。

石錐（第27図1）

外形は細身厚手で棒状になっており、つまみ部が僅かに丸く膨らんでいる。横断面は菱形になるように丁寧に仕上げられている。

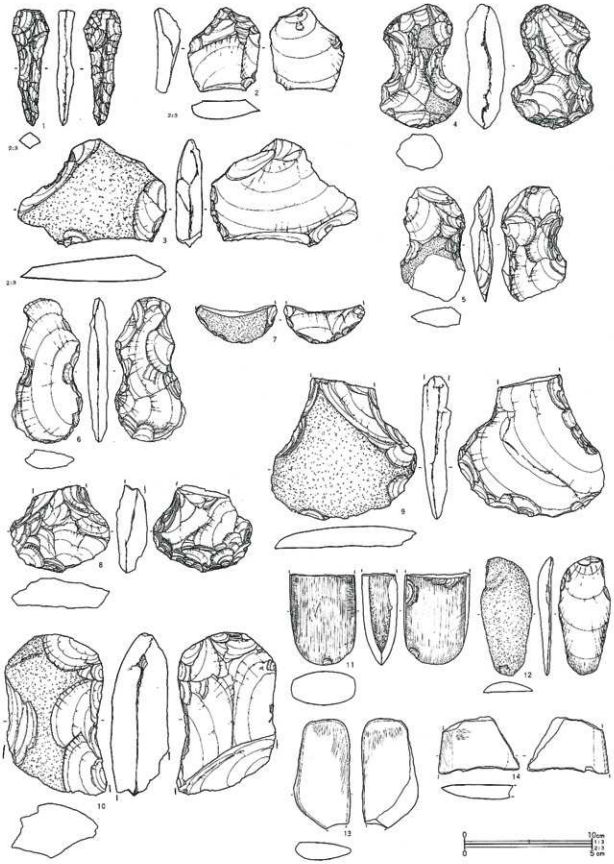
掻・削器（第27図2・3）

剥片の一部に刃部加工が施されてもので、定型的な掻・削器ではない。

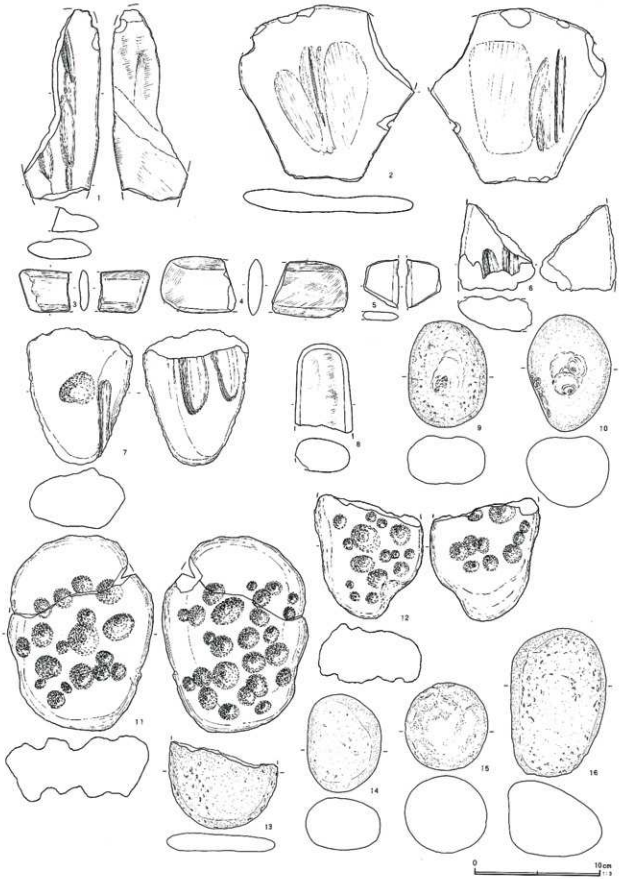
打製石斧（第27図4～10）

平面形状は全て基部に抉りの入る、いわゆる分銅形の打製石斧である。大きさによって4～7は中形、9・

第27図　包含層出土石器（1）



第28図　包含層出土石器（2）



10は大形に分けることができる。

磨製石斧（第27図11・12）

11は上半部を欠損する。側面を有する定格形で刃部は円刃である。12は正面に原石面を残す縦長剝片の端縁に研磨を有する、刃部磨製石斧である。

砥石（第27図13・14　第28図1～8）

第28図1・2・6・7はいわゆる有溝砥石である。第28図1・2は扁平礫の両面に、溝または浅い凹状の砥石面が見られる。第28図6・7は厚手の礫を素材に用いられており、溝は深い。

第28図3・4は扁平の礫を素材に長軸に平行するように鎬を思わせる屈曲面があり側縁は薄くなっている。いわゆる石包丁状砥石である。

凹石（第28図9～12）

9・10は厚手楕円形の川原石の平坦面に凹を有する。11・12はキメの粗い大形の安山岩の礫を用いて、両面に複数の凹を有するもので、いわゆる鮎の果石とも呼ばれる。

磨石（第28図13～16）

楕円形の川原石が用いられ、正面及び裏面の擦痕が認められる。

第２表　包含層出土石器観察表

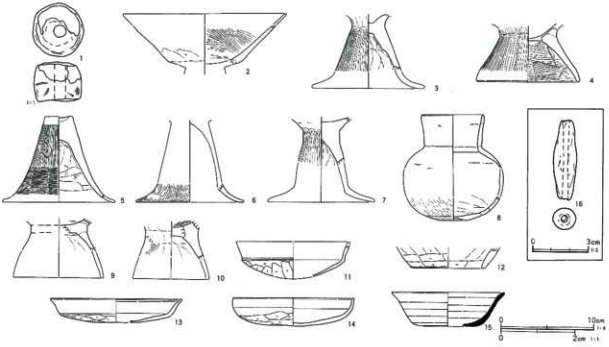
番号	器種	長さ／cm	幅／cm	厚さ／cm	重さ／g	石材	註記
第27図1	石錐	4.55	1.45	0.65	3.88	黒色頁岩	ＳＫ５－１区
2	掻・削器	3.25	2.85	0.80	9.20	〃	４区
3	掻・削器	4.30	5.85	1.05	28.54	〃	１区　旧河道
4	打製石斧	9.80	6.50	2.90	200.27	砂岩	２区
5	打製石斧	9.10	5.15	1.60	85.88	ホルンフェルス	(一括)
6	打製石斧	11.40	5.65	1.50	112.82	〃	２区
7	打製石斧	(3.00)	6.40	(1.40)	27.84	〃	５区　ＳＤ２
8	打製石斧	(6.90)	7.80	2.40	137.25	〃	２区
9	打製石斧	(11.25)	11.60	1.65	297.19	〃	４区　旧河道
10	打製石斧	(12.70)	7.85	4.35	560.60	〃	２区
11	磨製石斧	7.10	5.20	2.65	178.12	砂岩	
12	磨製石斧	9.30	4.10	0.85	44.80	黒色頁岩	２区
13	砥石	8.70	4.45	1.45	68.46	砂岩	２区
14	砥石	(4.50)	(6.40)	1.10	36.49	〃	２区
第28図1	有溝砥石	(15.00)	(5.90)	1.55	138.26	〃	(一括)
2	有溝砥石	13.55	13.95	1.80	399.39	〃	２区
3	砥石	3.20	(4.05)	0.75	12.00	〃	２区
4	砥石	4.50	(5.90)	1.10	29.32	〃	２区
5	砥石	(3.80)	2.80	0.65	8.14	〃	２区
6	有溝砥石	(6.75)	5.95	2.60	59.97	スコリア	３区
7	有溝砥石	(11.75)	8.30	4.70	432.81	砂岩	１区ＳＫ11一括
8	砥石	(6.95)	4.60	2.55	93.97	砂岩	１区　旧河道
9	凹石	8.30	6.30	3.75	280.77	角閃石安山岩	２区
10	凹石	9.20	6.60	5.65	393.06	泥岩	６区ＳＤ２
11	凹石	20.70	15.45	6.45	1860.00	スコリア	１区　ＳＫ10
12	凹石	(13.05)	11.55	6.05	682.82	スコリア	(一括)
13	磨石	(6.80)	8.60	1.85	122.75	安山岩	２区
14	磨石	7.70	5.85	4.05	281.55	角閃石安山岩	２区
15	磨石	6.90	6.50	6.10	359.88	安山岩	(一括)
16	磨石	11.70	7.55	6.05	734.05	石英閃緑岩？	２区

2．古墳時代

古墳時代の遺構・遺物はわずかである。遺構は5区第1号溝跡と6区第2号溝跡の2条で、出土した遺物及び遺構の重複関係から判断した。時期は中期のものと考えられる。

遺物は6区を中心に出土した。前期から後期までわずかづつ見られる。今回は調査区が狭かったため住居跡等は検出できなかったが周辺にこれらの遺構があると思われる。なお、3区では奈良・平安時代の遺物がごくわずかに出土した。ここに合わせて掲載する。遺構に関しては第32図及び第4表に一括した。

第29図　古墳時代の遺物



第3表　古墳時代遺物観察表

番号	器種	口径／cm	器高／cm	底径／cm	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	臼玉	直径1.40cm 高1.15cm 孔径0.30cm 重さ3.02g						90	5区SD1
2	土師器高坏				ABDEHJ	II	橙	10	6区SD2
3	土師器高坏				BDEHJ	II	橙	80	6区SD2
4	土師器台付甕			(11.0)	BEHJ	III	明黄褐	20	6区SD2
5	土師器高坏				ABDEHJ	III	橙	40	一括
6	土師器高坏			(11.6)	BDEHJ	III	鈍い赤褐	15	6区 外面赤彩
7	土師器高坏				ABDEHJ	II	鈍い橙	60	6区
8	土師器小型壺	(6.4)	—	(2.8)	ABDEHJ	III	鈍い褐	30	6区
9	土師器台付甕				ADHJ	III	鈍い黄橙	20	6区
10	土師器台付甕				BDEHJ	III	鈍い橙	15	6区
11	土師器坏				ABDEHJ	II	橙	10	6区
12	土師器甑			(8.0)	ABDHJ	III	鈍い黄橙	10	6区
13	土師器坏	(14.0)	2.5		BDEHJ	III	鈍い橙	20	3区
14	土師器坏	13.0	3.0		DEHJ	III	鈍い褐	10	6区
15	須恵器坏	(12.0)	3.6	(6.4)	DEHJ	III	灰黄	15	3区
16	土玉	長さ4.20cm 径1.10cm 孔径0.35cm				II	橙	100	2区 重さ5.45g

3．中近世

（1）井戸跡

第1号井戸跡（第30図）

2区D－9グリッドで検出された。北側半分は調査区外にかかる。確認面から約1mほど掘った所で、道路面からの深さが大きくなり危険なため調査を断念した。平面形はやや歪んだ円形或いは楕円形を呈すると思われる。大きさは検出された部分で2.3mである。

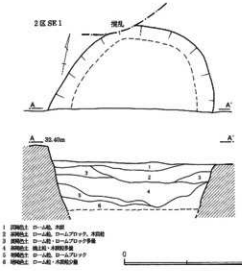
遺物は、出土しなかった。

遺構の時期は、遺物がないことから明らかでないが近世のものと考えておきたい。Dあ

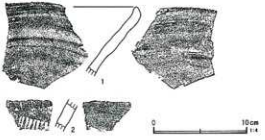
（2）溝跡

溝跡は、古墳時代と判断されるもの2条を除いて12条検出された。殆どが調査区に直行しており検出された長さは短い。断面は箱薬研状を呈するもの（1区SD1・6区SD4）が見られるが他は底面が広く段を持つものなど様々である。また、6区第6号溝跡は土層断面から最低1回の掘り直しがされたことが窺える。5区第2号溝跡からはこね鉢、常滑甕片が出土しているが、他の溝については出土遺物がなく、掘り込み面の分かるものなどから判断すると、殆どは近世以降と考えられる。

第30図　第1号井戸跡



第31図　溝跡出土遺物

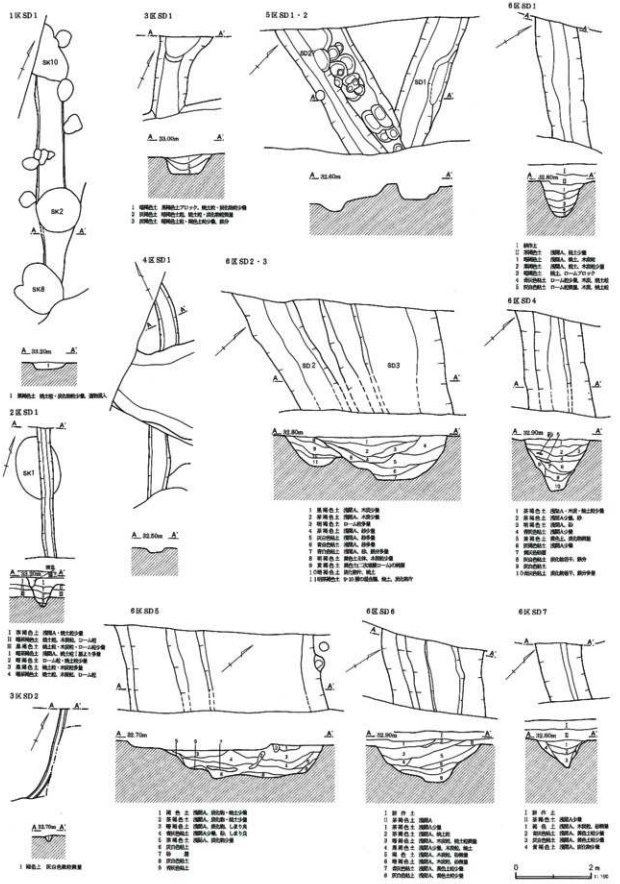


第4表　溝跡計測表

（単位：m）

遺構名	長さ	幅	深さ	時期	出土遺物	重複関係	備考
1区第1号溝跡	5.11	0.56-0.72	0.18	近世？		SK2	
2区第1号溝跡	3.43			近世以降		SK1	
3区第1号溝跡	2.22	0.86-1.38	0.48	近世			
第2号溝跡							
4区第1号溝跡	5.31	0.40-0.55	0.10			SK1	
5区第1号溝跡	3.61	0.65-1.12	0.38	古墳時代	滑石製臼玉	SD2	
第2号溝跡	3.92	1.55-1.63	0.26	中世	山茶碗系こね鉢・甕	SD1	
6区第1号溝跡	3.07	0.98-1.15	0.86	近世？			
第2号溝跡	3.15	1.20-1.35	0.75	古墳時代	土師器高坏他	SD3	
第3号溝跡	3.13	2.45-2.90	1.13	近世？		SD2	掘り直しあり
第4号溝跡	2.56	1.58-1.70	1.33	近世？			
第5号溝跡	2.14	3.68-3.83	0.88	近世？			
第6号溝跡	1.89	2.26-2.75	0.97	近世？			
第7号溝跡	1.60	1.05-1.19	0.74	近世？			

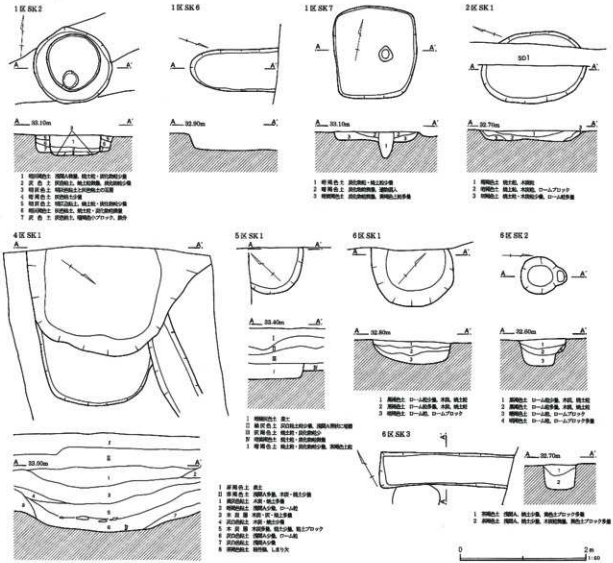
第32図　溝跡


1区SD1
SK10
SK2
SK8
3区SD1
5区SD1・2
SD2
SD1
6区SD1
4区SD1
6区SD2・3
SD2
SD3
6区SD4
2区SD1
SK1
6区SD5
6区SD6
6区SD7
3区SD2
0
2m

（3）土壙

土壙は９基検出された。形態は円形、方形、長方形等様々である。４区第１号土壙からは比較的纏まって遺物が出土した。その他の土壙からは遺物の出土が殆どないが、覆土の状況等から近世のものと考えられる。出土した遺物は殆どが18世紀代で、肥前系磁器及び瀬戸美濃系陶器で占められる。

第33図　土壙

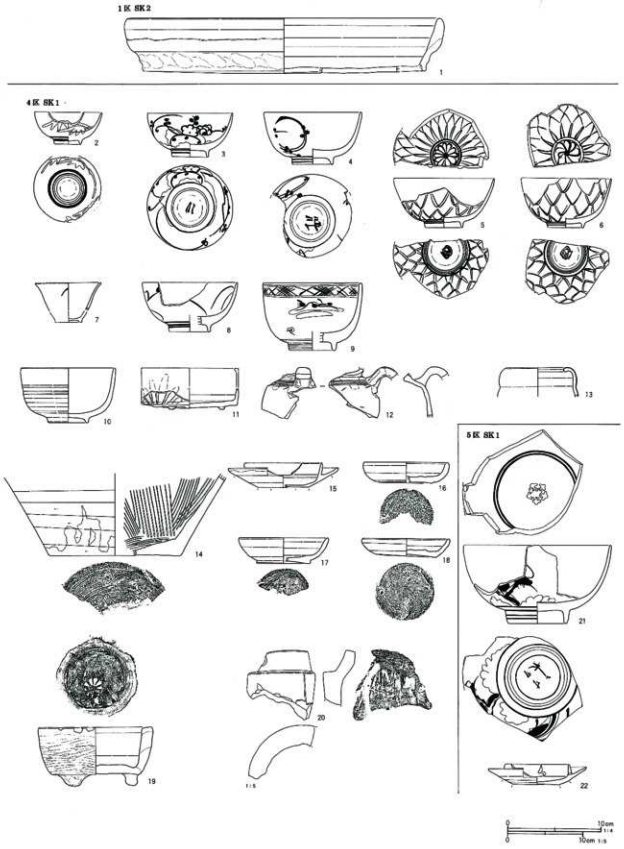


第５表　土壙計測表

（単位：cm）

遺構名	グリッド	長軸	短軸	深さ	方位	時期	出土遺物	重複関係
１区第２号土壙	B-9	89	85	28	N-9°-W	近世	焙烙	ＳＤ１
第６号土壙	B-9	138	67	25	N-20°-W	近世		
第７号土壙	A-9	145	132	16	N-10°-W	近世		
２区第１号土壙	C-8	165	114	18	N-20°-W	近世	陶磁器・土器・瓦	ＳＤ１
４区第１号土壙	H-7	293	252	265	N-54°-W	近世	陶磁器・土器	ＳＤ２
５区第１号土壙	K-4	86	72	112	N-47°-W	近世		
６区第１号土壙	M-2	130	88	35	N-48°-W	近世		
第２号土壙	L-3	75	58	43	N-0°-W	近世		
第３号土壙	M-2	209	51	39	N-61°-W	近世		

第34図　土壙出土遺物



第５表　土壙出土遺物観察表

図版番号	遺構	材質	器種	法量(cm) a	b	c	d	形状	成形	給付釉薬	文様	特徴	胎土色	推定産地	備考
第34図１	1区ＳＫ2	土器	焙烙	33.0	5.6	3.0			轆轤				灰白	在地産	
2	4区ＳＫ1	磁器	小皿	7.2	3.4	2.6		丸形	轆轤	染付 透明釉	外：笹		白	肥前系	
3	4区ＳＫ1	磁器	中皿	9.1	4.7	3.8		丸形	轆轤	染付 透明釉	外：草花 雪之輪 梅花	銘：「大明年製」	白	肥前系	
4	4区ＳＫ1	磁器	中皿	10.4	5.5	4.4		丸形	轆轤	染付 透明釉	外：草花	銘：「大明年製」	灰白	肥前系	
5	4区ＳＫ1	磁器	中皿	10.6	5.2	4.0		丸形	轆轤	染付 透明釉	外：二重網目 内：一重網目	見：花 銘：満福	白	肥前系	
6	4区ＳＫ1	磁器	中皿	9.6	5.2	3.8		丸形	轆轤	染付 透明釉	外：二重網目 内：一重網目	見：花 銘：満福	白	肥前系	
7	4区ＳＫ1	磁器	小皿	7.0				端反形	轆轤	染付 透明釉	外：笹		白	肥前系	
8	4区ＳＫ1	磁器	中皿	10.0	5.2	4.2		丸形	轆轤	染付 透明釉	外：草花		灰白	肥前系	
9	4区ＳＫ1	磁器	中皿	10.4	7.1	5.0		丸形	轆轤	染付 透明釉	外：山水		灰	肥前系	
10	4区ＳＫ1	陶器	中皿	10.0	5.8	4.3		腰張形	轆轤	灰釉 鉄釉	掛分け	沈線３本	黄白	瀬戸美濃系	
11	4区ＳＫ1	陶器	香炉			10.2		半筒形	轆轤	外：鉄釉	外：半菊文	貫刻り	黄白	瀬戸美濃系	三足貼付
12	4区ＳＫ1	陶器	中水注					後手張形	轆轤	鉄釉			黄白	瀬戸美濃系	
13	4区ＳＫ1	磁器	水滴？	5.4					轆轤	外：青磁			白	肥前系	
14	4区ＳＫ1	土器	擂鉢			14.0		鋼鐘形	轆轤	鉄釉		櫛目12本	黄白	瀬戸美濃系	
15	4区ＳＫ1	土器	灯明受皿	11.0	2.6	5.3		油溝アーチ状	轆轤	鉄釉			黄白	瀬戸美濃系	
16	4区ＳＫ1	土器	カワラケ	8.6	2.2	6.0			轆轤				淡褐	在地産	口：煤付着
17	4区ＳＫ1	土器	カワラケ	9.6	2.7	5.8			轆轤				淡褐	在地産	口：煤付着
18	4区ＳＫ1	土器	カワラケ	9.1	2.0	6.0			轆轤				淡褐	在地産	
19	4区ＳＫ1	土器	香炉or火入れ	12.0	6.2	9.0		半筒形	轆轤			見：花文刻印	黄灰	在地産	三足貼付
20	4区ＳＫ1	瓦	丸瓦				2.7						灰白	在地産	
21	5区ＳＫ1	磁器	大椀	15.6	8.3	6.3		丸形	轆轤	染付 透明釉	外：草花	見：五弁花 銘：「大明年製」	白	肥前系	コンニャク印判
22	5区ＳＫ1	土器	灯明受皿	10.5	2.2	4.9		油溝アーチ状	轆轤	鉄釉			黄白	瀬戸美濃系	

（４）その他の遺構・遺物

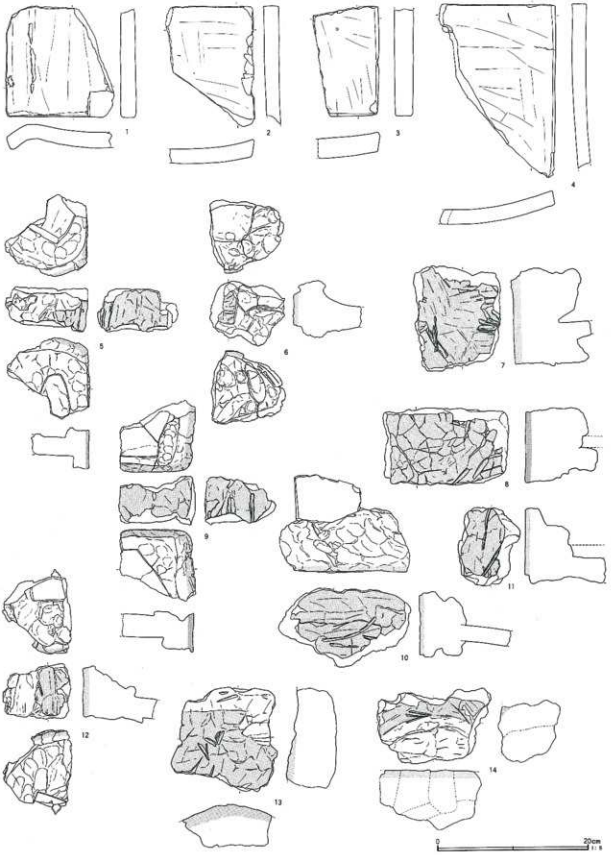
１区で瓦の焼成に伴うと考えられる遺構があった（第35図）。遺構は調査区北側の壁面にわずかにかかっていたが平面的に残すことはできなかった。調査区断面には焼土を多量に含む層が観察され、一番上に非常に硬化した粘土があることから天井部が崩落したものと考えられる。下部は被熱して赤化が激しくその両側に溝状の掘り込みが見られる。遺物は第36図に示した。１～４は桟瓦である。ただし、３については他の瓦より厚みがあることから、種類は特定できないが、所謂役物と呼ばれる瓦の可能性がある。５～14は炉壁と考えられる。スクリーントーンの部分は平坦面を成し還元状態である。この部分が炉の内面と考えられる。良好な還元状態を示しているのは、炉の内面から５～10mm程でそれより内側は明灰色或いは褐色を呈する。粘土にはスサの痕跡が明瞭に認められる。５～12

第35図　瓦焼成遺構断面図

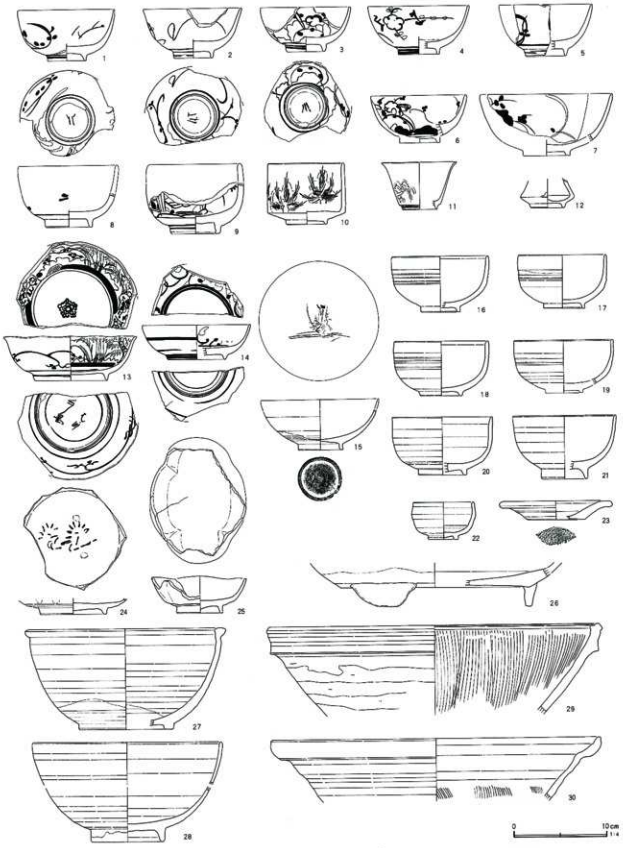
Ⅱ　灰褐色土　粘性強　しまり良　焼土粒・炭化粒微量　周辺人中量　褐色ブロック少量
Ⅲ　暗灰褐色土　粘性弱　しまり良　焼土粒・炭化粒微　周辺人多量　褐色ブロック中量
Ⅳ　明褐色土　粘性中　しまり良　焼土粒・炭化粒・白色粒粒少量
1　黒褐色土　粘性中　焼土粒少量　炭化粒粒微量　硬い表層土粒の焼土
2　明灰褐色土　粘性強　しまり強　焼土粒・焼土ブロック中量　炭化粒粒・炭少量、瓦破片少量
3　暗赤褐色土　粘性強　しまり大　焼土粒・焼土ブロック・炭化粒粒・灰多量　瓦破片少量
4　明褐色土　粘性強　しまり強　焼土粒・焼土ブロック少量　炭化粒粒・炭微量　瓦破片少量
5　灰褐色土　粘性中　しまり良　焼土粒・焼土ブロック少量　炭化粒粒・炭微量　瓦破片中量
6　赤褐色土　焼土

0　2m
1:60

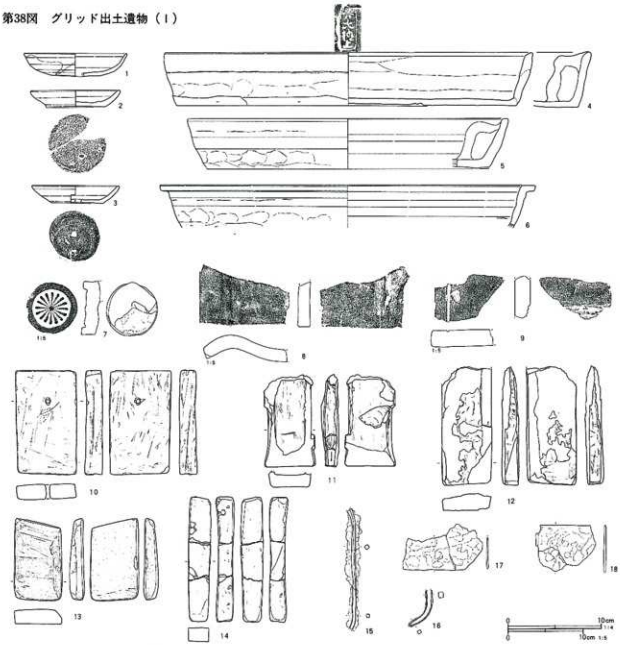
第36図　瓦焼成遺構出土遺物



第37図　グリッド出土遺物（1）



第38図　グリッド出土遺物（Ⅰ）



第７表　グリッド出土遺物観察表

図版番号	遺構	材質	器種	法量（cm）				形状	成形	釉付　釉薬	文様	特徴	粘土色	推定産地	備考
				a	b	c	d								
第37図 1	2区	磁器	中碗	10.4	5.4	4.2		丸形	轆轤	染付　透明釉	草花	銘:「大明年製」	灰白	肥前系	
2	2区	磁器	中碗	10.6	5.2	4.2		丸形	轆轤	染付　透明釉	草花	銘:「大明年製」	灰	肥前系	高台砂付着
3	2区	磁器	中碗	9.6	4.7	4.0		丸形	轆轤	染付　透明釉	雪之輪	銘:「大明年製」	灰白	肥前系	
4	2区	磁器	中碗	10.8	5.1	4.2		丸形	轆轤	染付　透明釉	草花　梅花		灰白	肥前系	
5	1区	磁器	中碗	10.0	5.4	4.0		丸形	轆轤	染付　透明釉	草花		灰	肥前系	
6	1区田河道	磁器	中碗	10.2				丸形	轆轤	染付　透明釉			灰白	肥前系	
7	2区	磁器	大碗	14.0				丸形	轆轤	染付　透明釉			灰白	肥前系	
8	2区	磁器	中碗			5.0		腰張形	轆轤	染付　透明釉			灰	肥前系	貫入
9	2区	磁器	中碗			5.2		筆管形	轆轤	染付　透明釉			灰	肥前系	貫入
10	1区田河道	磁器	小碗	8.0	7.0	4.2		半筒形	轆轤	染付　透明釉			灰白	肥前系	
11	2区	磁器	小碗	8.0	5.0	3.6		端反形	轆轤	染付　透明釉			白 ガラス質	瀬戸美濃系	
12	2区	磁器	花瓶？			3.6	5.8			透明釉			白	肥前系	高台砂付着

図版番号	遺構	材質	器種	法量 (cm) a	b	c	d	形状	成形	絵付 釉薬	文様	特徴	粘土色	推定産地	備考
第37図 13	2区	磁器	五寸皿	14.2	4.7	7.7		端反形		染付 透明釉		見：五弁花 銘：[大明年製]	淡黄灰	肥前系	貫入
14	2区	陶器	小皿	11.4	3.7	6.2		丸形		染付 透明釉			灰白	肥前系	
15	2区	陶器	鉢			4.8		浅丸形	轆轤	鉄絵 透明釉	見：山水		黄白	肥前系	京焼風
16	2区	陶器	中碗	10.4	5.9	4.2		腰張形	轆轤	灰釉 鉄釉	掛分け	沈線4本	黄灰	瀬戸美濃系	
17	2区	陶器	中碗	9.2	5.7	4.4		腰張形	轆轤	灰釉 鉄釉	掛分け	沈線3本	黄灰	瀬戸美濃系	
18	2区	陶器	中碗	10.0	5.8	4.4		腰張形	轆轤	灰釉 鉄釉	掛分け	沈線5本	黄灰	瀬戸美濃系	
19	1区旧河道	陶器	中碗	10.6				腰張形	轆轤	灰釉 鉄釉	掛分け	沈線2本	黄灰	瀬戸美濃系	
20	表採	陶器	中碗	10.6	6.1	5.0		腰張形	轆轤	鉄釉			灰		
21	1区旧河道	陶器	中碗	10.6	6.7	5.0		丸形	轆轤	透明釉			黄灰	肥前系	京焼風
22	2区	陶器	小碗	6.4	4.0	3.2		蛤碗形	轆轤	灰釉			黄白	瀬戸美濃系	
23	2区	陶器	壺蓋	12.0	2.0	6.0			轆轤	鉄釉			黄白	瀬戸美濃系	
24	2区	陶器	皿			7.0			轆轤	灰釉			灰	瀬戸美濃系	目跡3ヶ所
25	2区	陶器	皿		3.9	4.6	10.2	木瓜形	型打	灰釉			黄白	瀬戸美濃系	
26	2区	陶器	三脚皿			20.0			轆轤	灰釉			灰	瀬戸美濃系	3足貼付
27	表採	陶器	中鉢	21.4	10.6	10.0		丸形	轆轤	灰釉			黄白	瀬戸美濃系	
28	2区	陶器	中鉢	20.0		7.6		丸形	轆轤	灰釉			黄灰	瀬戸美濃系	
29	2区	土器	擂鉢	35.0					轆轤			口縁外帯3段 口縁内凸帯大	赤褐		櫛目11本
30	2区	土器	擂鉢	35.0					轆轤	鉄釉		口縁折縁形	黄白	瀬戸美濃系	櫛目17本
第38図 1	2区	土器	灯明皿	11.0	2.5	5.0			轆轤	鉄釉			褐	瀬戸美濃系	
2	1区旧河道	土器	カワラケ	9.5	1.8	6.1			轆轤				暗褐	在地産	内外面黒色
3	表採	土器	カワラケ	9.3	1.9	5.4			轆轤				暗褐	在地産	内外面黒色
4	1区旧河道	土器	焙烙	39.3	5.6	36.2			轆轤			「大極上」刻印	黄白	在地産	
5	2区	土器	焙烙	34.0	5.3	29.8			轆轤				黄白	在地産	
6	2区	土器	土鍋？	40.0					轆轤				黄白	在地産	
7	表採	瓦	軒桟瓦	6.9	5.1	1.7					菊16弁		灰	在地産	
8	2区	瓦	桟瓦			1.7	4.2						灰	在地産	
9	2区	瓦	板状瓦？			2.1	1.8						灰	在地産	
10	1区旧河道	滑石	温石	12.9	6.5	1.6	0.6								
11	2区	粘板岩	硯	9.7	5.4	1.6						側面突起			
12	1区旧河道	粘板岩	砥石	11.6	5.3	1.8									
13	1区旧河道	凝灰岩	砥石	8.7	5.2	1.5									
14	1区旧河道	凝灰岩	砥石	13.2	2.2	1.4									
15	2区	鉄製品	釘？	12.8	0.4	0.4									
16	4区SK1	鉄製品	釘		0.5	0.6									
17	1区SK2	鉄製品	不明	8.4	4.9	0.2									
18	1区SK2	鉄製品	不明	6.4	4.9	0.1									

には瓦の痕跡が見られ、10には桟瓦が残っていた。瓦を嵌め込んだ部分には指で粘土を圧着した痕が見られ、その後炉壁表面の粘土を塗りこんだものと考えられる。遺構の時期は、周辺で出土する遺物に近代以後のものが見られないことから、他の遺構と同じく近世と考えられる。

2区グリッド及び1区の旧河道を中心として近世の陶磁器類が出土した。磁器では肥前系の染付碗、皿が主体を占める。陶器では瀬戸美濃系の碗、皿が主体となり、肥前系の鉢、皿が見られる。土器類では、擂鉢、灯明皿、焙烙などがある。他に瓦、砥石、硯、釘などが出土した。時期は18世紀代が中心である。